

2002年度

第2回NGO - JICA合同ワークショップ

— 地域で活かす、地域を活かす、国際協力!! —

報告書

平成15年2月

国際協力事業団（JICA）
九州国際センター

九州セ

JR

02 05

は じ め に

昨今、阪神大震災等でのNGO・NPO活動により、日本社会におけるそれら団体への期待と要望が年々たかまってきています。一方、国際社会の中では、NGO・NPOの活動なしでは国際協力の世界を語るができないほどの存在となっています。昨年8月にヨハネスブルクにおいて実施された「持続可能な開発に関する世界首脳会議（WSSD）」でもNGO・NPOの存在・活動が今後の地球規模の課題である環境問題・貧困問題等の解決に重要な位置を占めることが再確認され、世界的な広がりでも認識されました。

JICAは国の行政改革の一環として、平成15年10月1日より新たに独立行政法人「国際協力機構」として発足することになりました。その中で、開発途上国等への「復興」への支援業務が新しく認められるとともに、NGO、地方自治体、大学等多元的なプレイヤーと協力しながら、従来以上に市民レベルの国際協力を推進する活動が強化されます。

このような情勢の中で、昨年度に引き続き九州地区の第2回NGO - JICA合同ワークショップを、NGO福岡ネットワークを初めとする関係者と共同で開催しました。比較的小さなNGO・NPOが多い九州地区においては、お互いの情報等を交換するだけでは不十分なため、お互いに重要性・必要性を認識しながらなかなか実践的な活動ができない広報に焦点を当て、能力向上研修を第1日目に実施しました。

第2日目は、各団体が活動している中での問題や課題を5分野に分け、分科会を実施しました。その分科会では日本各地域の特性を活かした国際協力の前線で活躍している方々から活動事例を発表していただくことにより、国際協力は私たち国民の生活と無縁のものではなく、自分たちの身近な地域の発展と開発途上国の発展が繋がっていることを、参加者の皆様が改めて認識する場となりました。

本ワークショップをとおして、更なるネットワークの広がりや協力関係を強化できますことを願うとともに、お互いの活動の更なる発展を期待しております。

最後に、本報告書のとりまとめにご尽力くださった方々に感謝の意を表するとともに、本ワークショップの開催にあたり多大なるご協力を頂いた準備委員会、各NGO団体、他関係各位に対し、甚句の謝意を表する次第です。

平成 15 年 2 月

国際協力事業団
九州国際センター

所 長 山 口 三 郎

目 次

ワークショップ概要

1．実施要項	1
2．全体日程	2

分科会・全体会

1．プログラム	5
2．分科会内容	
(1)第1分科会「地域の持続的発展・住民参加型開発」.....	7
(2)第2分科会「地域を守る、地域が守る農業」.....	15
(3)第3分科会「共に守ろう、未来の地球（ほし）を！」.....	25
(4)第4分科会「「生きる力」をはぐくむ教育」.....	33
(5)第5分科会「南のパートナーとの協力関係づくり」.....	43
3．全体会	51

能力向上研修・広報強化に向けて

1．プログラム	55
2．研修内容	57
(1)アイスブレイキング	57
(2)ワークショップ「自分たちの広報を見つめなおそう」	59
(3)広報事例紹介	67
(4)JICAの広報	70

参考資料

- 1 準備委員会リスト
- 2 「能力向上研修」参加者リスト
- 3 アンケート集計結果
- 4 「能力向上研修」募集要項
- 5 「分科会」参加募集パンフレット

ワークショップ概要

1. 実施要項

(1)実施目的

- ・国際協力を実施する関係諸機関（NGO、自治体、JICA等）のネットワークをと
おして、協力関係作りを拡充すること。
- ・地域の特性を活かした国際協力の事例を共有し、それぞれの活動の発展につなげ
ること。
- ・活動活性化と組織強化を目指した能力向上研修 - 広報強化に向けて - をとおし
て、国際協力のあり方を考える場とすること。

(2)実施日時

平成14年12月21日(土)および22日(日)

(3)実施場所

第1日目 12月21日(土) JICA九州国際センター（北九州市八幡東区）

第2日目 12月22日(日) 天神ビル11階（福岡市中央区天神）

(4)主 催

第2回NGO - JICA合同ワークショップ準備委員会、
NGO福岡ネットワークおよびJICA九州国際センター

(5)後援団体

福岡県、福岡市、北九州市、(財)福岡県国際交流センター、
(財)福岡国際交流協会、(財)北九州国際交流協会、
西日本新聞社、朝日新聞社、毎日新聞社および読売新聞社

(6)内容・対象

第1日目 12月21日(土)

内容：能力向上研修 - 広報強化に向けて -

対象：九州7県内の国際協力に従事するNGOスタッフ

第2日目 12月22日(日)

内容：分科会 150名（各分科会 約30名）

全体会 150名

各分科会での成果を共有し、新たな協力関係づくりをおこなう

対象：NGO、国際協力関係機関、自治体関係者、国際協力に関心がある方
各分科会テーマ

分科会 1：地域の持続的発展・住民参加型開発

～国境を越えてつながる地域住民のエンパワーメント～

分科会 2：地域を守る、地域が守る農業

～環境でつながる地域と世界～

分科会 3：共に守ろう未来の地球（ほし）を

～私たちにできる環境保全～

分科会 4：「生きる力」をはぐくむ教育

～こどもと女性の未来に思いをよせて～

分科会 5：南のパートナーとの協力関係づくり

～南のNGOとのパートナーシップを考える～

2. 全体日程

12月21日(土)	
時間	内容
9:00	受付
9:30～10:15	オリエンテーション アイスブレイキング(自己紹介)
10:30～12:30	ワークショップ 「自分たちの広報をみつめなおそう」
12:30～13:30	休憩
13:30～14:30	ワークショップ
14:45～16:00	NGOの広報～事例紹介～ パネルディスカッション：様々な広報の形
16:15～17:30	JICAの広報～市民参加型国際協力に向けて～

12月22日(日)		
時 間	内 容	備 考
10:00	受 付	
10:30~15:00	分科会 第1分科会:「地域の持続的発展・住民参加型開発」 第2分科会:「地域を守る、地域が守る農業」 第3分科会:「共に守ろう、未来の地球(ほし)を!」 第4分科会:「生きる力」をはぐくむ教育」 第5分科会:「南のパートナーとの協力関係づくり」	2号室 3号室 6号室 11号室 8号室
15:00~15:30	アンケート記入	
15:30~17:00	全体会	10号室

分科会・全体会

日 時：2002年12月22日(日) 10:30～17:00

場 所：福岡天神ビル11階

分 科 会

九州において関心が高いと思われる分野を5つに絞り分科会を設け、各テーマに関連した国際協力を実践しているリソースパーソンが3名ずつ事例発表を行った。発表後は、グループ別意見交換やワークショップなど、それぞれ形式の異なった方法で内容を深めていった。予定時刻を過ぎても熱い討論が繰り広げられた分科会が多く、それぞれ大いに盛り上がりを見せたため、時間不足であるとの意見も出たほど盛会であった。

1 プログラム

(1)目 的

- ・分野別に地域の特性を活かした国際協力の事例及び課題を共有し、それぞれの活動の発展につなげること。
- ・国際協力を実施する関係諸機関（NGO、自治体、JICA等）のネットワークをとおして、協力関係作りを拡充すること。

(2)対 象

NGO、国際協力関係機関、自治体関係者、国際協力に関心がある方

(3)日 程

時 間	内 容	備 考
10：00	受付（各分科会）	
10：30～15：00	分科会 第1分科会：「地域の持続的発展・住民参加型開発」 第2分科会：「地域を守る、地域が守る農業」 第3分科会：「共に守ろう、未来の地球（ほし）を！」 第4分科会：「生きる力」をはぐくむ教育」 第5分科会：「南のパートナーとの協力関係づくり」	2号室 3号室 6号室 11号室 8号室
15：00～15：30	アンケート記入	
15：30 15：35～15：45 15：45～16：50 16：50 16：55 17：00	全体会 開会の挨拶：NGO福岡ネットワーク事務局長 各分科会コーディネーター、リソースパーソンの紹介 グループ別ワークショップ（分科会の体験共有） ワークショップの結果発表 閉会の挨拶：JICA九州国際センター 所長 閉会	10号室

第 1 分科会

「地域の持続的発展・住民参加型開発」

～ 国境を越えてつながる地域住民のエンパワーメント～

日 時：2002年12月22日(日) 10:30～15:00

場 所：福岡天神ビル11階 2号室

第1分科会 「地域の持続的発展・住民参加型開発」 ～ 国境を越えてつながる地域住民のエンパワーメント～

1 コーディネーター

竹下宗一郎 地球市民ネットワーク鹿児島 事務局長

2 リソースパーソン

成毛 克美 NPO法人筑後川流域連携倶楽部 理事・
筑後川まるごと博物館 事務局長

古川 学 小値賀町役場住民課 係長・おぢか国際音楽祭 事務局

椿原まりこ 四季菜館 館長

3 参加人数

27名

4 分科会のねらい

目標設定

国際協力を地方が、または地方で、行うことの意味付けと方法

問題意識

地域が裨益し、その便益を自治体や住民が認識できなければ国民参加型の国際協力は掛け声倒れとなってしまう、また従来の動員型開発の延長線上に位置付けられてしまう危険がある。地方自治体や住民が開発においてどのような役割を演じているかを踏まえて、国際協力においてもどのような役割を持つことが期待されるかを整理することが必要である。このことを通して従来ありがちであった技術移転型の国際協力から住民主体となった参加型の開発の協働への転換が期待される。

地域開発においては、外部とのネットワークによる地域資源への気づきと住民や自治体の地域への帰属意識が活性化の出発点となる。国際協力や交流を自治体事業として行うことは国家や大都市においては意味を持つが、小規模自治体においては負担が多だけで住民の理解を得ることは困難である。むしろ、地域が日常的に行っている内発的な地域づくりを持続的に行っていくことに、外部の人間も参画する一手法として国際的なアクターが加わることが望まれるこのことを通して住民やその他のステークホルダーの地域に対するコミットメントなり帰属意識なりが高まれば国際協力はその地域における正当性を主張できるのではないか。

小値賀（おぢか）の地域資源とその活用

発表者

古川 学 小値賀町役場住民課 係長・おぢか国際音楽祭 事務局

内 容

小値賀町は長崎県五島列島の北部に位置しており、大小17の火山群島からなっている。そのため、太刀魚や鮑といった漁業に恵まれ更には栄養を多く含んだ赤茶色の土により農作物にも恵まれている。「大地が育んだ神様からの贈り物」というキーワードを持つこの島でどのような開発が行われていったのか説明した。古川氏が役場の教育委員会に入った当初、4、5人の幾つかグループの青年会が存在していたがテンデ\nンバラバラだった。もっと楽しくやろうと、古い遊びや島固有の文化の発見を通して、小値賀を知ることから始まり、彼らをまとめた。その後、「島に残ったからにはやもえん」という発想から「やもえん隊」という会も生まれた。後に町長から「人づくりのための人材育成塾をつくって下さい」と頼まれ、長崎県ウエスレヤン大学の学長を塾頭に設立した。最初は3人しか集まってこず頭を抱えたが、何とか若い人を集め塾をスタートさせた。これら計画を立てるのに関わった若者達自身が入る事により本格的に始動した。その卒業生が今では島の行事がある時はリーダー格となっているという。

2000年の5月の連休にザルツブルクから音楽家を招き、小値賀島の隣りにある野崎島という島で「長崎国際音楽祭」を開催した。1講演5万円という破格値で引き受けてもらえ、聴衆者も多く訪れ音楽祭は大成功に終わった。定住者1名という無人島にも近い野崎島をザルツブルクの音楽家が大変気に入った事により、来年2度目の音楽祭が開催される。彼らはゲリラ的に小値賀島で演奏したり、子供たちに教えたりと大変触れあいを持ってくれた。また、人材育成塾設立の際知り合った元JICA職員、現久留米大学助教授の西川芳昭氏の紹介により、海外研修員の地域文化開発を学ぶフィールドワークの場ともなった。アフリカやアジアから訪れた研修員たちと住民が触れ合う事により、住民自身考えていなかった事、気付かなかった事を知ることとなり良い刺激を受けた。

小値賀島では「内部の資源を外部の人に開拓してもらおう」という形で地域の活性化が進んでいる。そもそも島の青年グループ（やもえん隊）が島を再認識することとなったのも海外留学生と触れ合ったことによっている。

「人と人との触れあいを大切に」をモットーに「一人ひとりの考え方を開拓していく」ことを着々と実行していつている。

環境循環型農業をとおして...

発表者

椿原まり子 四季菜館 館長

内 容

四季菜館は八女郡黒木町にある。ここでは環境循環型農業により自給自足の生活がされている。農薬や化学肥料を使わず、合鴨農法により米を作り、堆肥をつくり野菜を育てる。電気は太陽光により発電、薪ボイラー、合併浄化層も設備されている。昨年には炭焼き釜も作り、囲炉裏作りも行った。

食べ物を作ることから食べることまでを含めたトータルで「食べ物が大切であること又人間生活の基本であること」をベースに四季菜館を運営している。

四季菜館では、行事ごとに体験学習ができるシステムになっている。稲作体験コースと山林体験コースの2種類である。前からある稲作コースに加え、平成6年、丁度冷害により外国米が大量輸入されたころ「山村塾」を開設した。やはり、自分達で作ったものを食べようという考えが基にある。今でも田植えや稲刈り時には約50名の人が集まる。この他、里山ミニワークというワーキングホリデーや年に1度、国際里山田園保全ワーキングホリデーも開かれている。石積みの講師として地元の80歳になる方が役割を担っており、それは後継者の育成にもつながっている。九州芸術工科大学の教授と出会い、「この放棄してあるたくさんの土地をいっそのこと全員でやったらどうですか。海外にそのようなことをしている団体を知っているので紹介しますよ。」と勧められたことが、この国際ワークを始めるキッカケだった。

四季菜館に泊まる際は、お金・おやつ・勉強道具・シャンプーやリンスの持込が禁止されている。四季菜館の食材を利用した食事作りはもちろん食器洗いを含めた後片づけも、すべてを自己の責任で実施させる。このような体験を通して生きていけることの大切さ、食べていけることの大切さを学ぶ。

今後の課題として、このような国際交流を含めた活動をどう国際協力に結び付けていくかが挙げられた。



事例発表の様子

午後

参加者を含めたディスカッション

午後は、リソースパーソンが発表した内容をもとに、参加者全員が常日頃問題視していること、疑問視していることを挙げ、黒板に張り出した。それらは「持続性」「ネットワーク」「住民参加型」と約3つのテーマに分けられた。

全体的には「持続性」を中心に話が展開された。まず「活動を持続させる為に人の心を動かすものは何か」、「持続的に発展する事は可能か」等の疑問が挙げられた。それらに対して成毛氏は「持続というのは必ずしも前提でないから、持続はしなくても良いが、まず、住民達がそれぞれに地域に対して魅力を感じているかが大事だ。また、最低限後に残す意味での教育プログラムは作っていくべきである。もう1つは、自分たちの運動は基礎におき、足りない部分をネットワークで補う。それらが持続につながるのではないか」という回答をした。

計画をリニューアルしていくこと、開発に関わる人々の考え方のリニューアルも持続につながるという意見もあった。実際現場で働いている参加者からは「住民の本音を聞きだす等の抱えている問題の拾い方で開発のあり方、ひいては持続性にもつながってくると思う。」という声もあった。外部との交流により地域資源の発見を行ってきた小値賀島の古川氏は「私たちはキッカケを提供しただけで、住民は「よう来たね」ときちんと受け入れる。それで研修生とも自由に交流出来る。そのなかで雑談をする

ことにより自然と問題を発掘していく。」と言われた。

四季菜館館長の椿原氏はこう主張した。「四季菜館は多くの応援団に支えられている。そもそもこの様なことを始めたのは開発うんぬんでなく、「コーヒー牛乳が出る牛はどれ？」などと言う現代の都会の子供たちに自然の中で暮らすことの楽しさや大切さを知ってもらう為に始めた。これが出来ればそれ以上のことは望まない。だから儲けるためなど、実益を求めてやっているわけではない。実際、国際ワーキングホリデーなども資金運営の都合上1回で終わるだろうと思っていた。だが海外の人も皆、ボランティア的にやってくれている。しかも参加費まで払ってくれる。そんな応援団がいてくれるからこそ今も続けていられる。」と。

また、「ネットワーク」に関しては数人の参加者から「NGO、JICAと行政とのつながりが不十分」という課題が挙げられた。国際協力の立場から見て、今の時点では都市での活動が多いINGOの活動をどう他の地域と関わりを持たせるか、海外も国内も同じことを行っているのにネットワークが不十分な為に十分に力が発揮されていない、後世に活動のネットワークをどう残していくか、どう活かしていくかが問題、などの意見もあった。



ディスカッションの様子

6 コーディネーターの所感

「交流」から「協力」になるのではなく、「協力」という中に「交流」という要素が行ったり来たりしている、その過程に「学び」というものがある、「協働」へとつながっていくのではないかと。どう資金を運営していくか、応援団を増やしていくか、どう組織にPRしていくかなどもう少しつっこんでみたかったが、「持続的開発」に関してはかなり深い所まで話し合えた。リソースパーソンの話が大変参考になったと思うので、是非実際各地域を訪ねて、応援団を増やして欲しい。

7 記録者の所感

全体を通して感じた事は、「地域開発」を「国際協力」にどうつなげていくかが課題だということだ。それを解決していく上で、実際にその地で開発を行う人がどれだけ外部の人との出会いを求めるか、また、NPOやJICAといった団体の人々がどれだけその地に係わり合いを求めるか、つまり国際協力へとつながり得る「キッカケ」をどう持つかが、まずは必要なのではないかと感じた。

第2分科会

「地域を守る、地域が守る農業」

～環境でつながる地域と世界～

日 時：2002年12月22日(日) 10:30～15:00

場 所：福岡天神ビル11階 3号室

第2分科会 「地域を守る、地域が守る農業」 ～環境でつながる地域と世界～

1 コーディネーター

佐藤 剛史 NPO法人（申請中）環境創造舎 代表理事

2 リソースパーソン

八尋 幸隆 明日のカンボジアを考える会 理事

矢澤佐太郎 日本農業実践学園 嘱託

椿原 寿之 山村塾 代表

3 参加人数

26名

4 分科会のねらい

この分科会が始まるまでの時間、ロビーでくつろいでいたリソースパーソンの1人である八尋幸隆氏が呟いた。「農業の場合、途上国と同じくらい...それ以上に日本の農業が深刻だからなあ...」。八尋氏のこの発言が、まさにこの分科会の狙いの一つである。

過剰な農林産物輸入がわが国の農林業を衰退させている。それは後継者不足、離農、農村の過疎化、耕作放棄地の増大、等々の形で表面化している。経済効率、国際分業の視点からすれば、それは当然のことかもしれない。

しかし農林業の場合、それだけではすまされない。農林業は多面的な機能を有しているからだ。農林業は、土砂崩れを防ぎ、水を涵養し、大気を浄化し、生きものを育み、景観を形成する。これらは貨幣では評価されない外部経済効果である。

当然、農業が衰退すれば、農業が有する多面的機能 = 外部経済効果も衰退してしまう。それは、農林業が育んできた豊かな環境やそのめぐみを、日本国民、地域住民が享受できなくなってしまうことを意味する。一方、海外では、輸出を目的とした農林業の過剰な集約化が環境破壊をもたらしている。

農林業と環境を通じて地域と世界がつながる。私たちはこの問題をどのように考え、国際協力を通じてどのように取り組んでいけばよいのであろうか。

この分科会のねらいは、この日本農業及び途上国農業の課題と、それをもたらす構造、両者の繋がりを再考することにある。

5 分科会内容

午前

アイスブレイク

参加者の緊張を解きほぐすために、アイスブレイクとして自己紹介を行った。はじめに、2名ずつペアを組み、名前、所属、最近面白かったこと、このワークショップに参加した理由などについて、お互いにインタビューを行った。次にペア毎に、全員の前で、お互いのことについて紹介しあった。

やはり、相手の所属などを聞くと、より詳しく「なにをやっているか」などについて聞きたくなるようで、インタビューが非常に盛り上がった。発表の場でも、笑いを誘う場面が多くあり、なごやかな雰囲気の中でのワークショップが始まった。



アイスブレイクの様子

リソースパーソンによる事例紹介

近代化技術と持続的技術との狭間で カンボジア農業の今
発表者

八尋 幸隆 明日のカンボジアを考える会 理事

内 容

カンボジアでは、独裁政治と内戦によって農業、農村が疲弊してしまっている。この問題に対して、市民レベルで何が出来るのかを考えることが重要である。

つまり、現在のように大量の化学肥料や農薬を援助として送るのではなく、これからは「技術を教えるのではなく、コミュニティを育てる」という方針を定着させていかねばならないだろう。特にカンボジアでの生活は、トンレサップ湖の豊かな恵みに支えられている部分がある。化学肥料や農薬を使用して一時的に収量を増大しても、トンレサップ湖が化学肥料や農薬で汚染されてしまえば、元も子もないのだ。

そこで、多くの現地の地域団体を育てていき、例え時間がかかろうとも農薬に頼らない、無理のない安定した農業をやるべきであろう。例えば、カンボジアでは広大な面積の土地はあるのだが、農業を始めようとするとすぐに土が痩せてしまう。カンボジアでは気候が厳しいので、開墾し地表面が露出するとすぐに地力が流亡してしまうのだ。そこで、乾季の間に緑肥を増やし続け、幾月かをかけてすこしずつ土を肥やしていくことが、その国にとって安定した農業を手に入れるために重要であると考えている。

今ではNGO団体（るしな・こみにけーしょん・やぼねしあ、明日のカンボジアを考える会）の努力が次第に実を結びつつある。化学肥料を使っている農産物に負けない程の出来の良い米や野菜の生産量は年々増加している。その結果、各地でこうした持続的技術を用いた農業を実験的に進める人たちも増えてきている。そのための費用こそ、本当に援助していかなければならないものではないだろうか。

途上国、山間傾斜地における農業技術指導の経験から

発表者

矢澤佐太郎 日本農業実践学園 嘱託

内 容

1966年IR - 8に代表される高収量品種の出現（水開発、肥料、農薬投入で食料生産増大）により、1950年から2000年にかけて穀物の世界生産量は6億トンから18億トンへと3倍に増加した。水や優良種苗、肥料が入手でき、耕作に適したところに技術が波及し、成果をあげてきたが農耕条件の不利な地域が取り残されてきた。

農業分野での支援に必要なことは「持続的な生産である」とよく言われるが、それよりも、今苦しんでいる人たちをどう救っていくかが先決であるはずだ。あるところには食料があり、無いところには全く無いのが現状なのだ。いま、そうした貧困者は全世界で8億人から13億人といわれている。

世界の飢餓の大半はインド亜大陸、サハラ以南のアフリカに集中している。そこは“灌がい用水がない、傾斜地で農作業がしにくい、市場から遠く農業資材が手にはいらない、男の働き手が出稼ぎで婦人と子供の世帯が多い、収穫物を出荷する市場やアクセスがない”といわれる地域である。要するに何も無いところの農業地域で貧困からの脱出にあえいでいるのである。

そうした地域では、木を切ってはいけないことが分かっているにもかかわらず炊事や小金がはい

る炭焼きに使う。山に牛や山羊を過放牧すると木や草を枯らすことが分かっているが家畜が財産だから家畜を山に放す。堆肥を作り施用する技術を持たず、肥料を買う金もないので山焼きをして種をまく。よくないと分かっているが（環境の劣化を肌で感じていても）このやり方以外に術がないのだ。

そんな状況に立たされている人たちのための真の支援とは、何も無いところで共に考え、現地主体のゆっくりペースでの協力ではないか。そうした支援、協力が可能なのはJICAよりもむしろNGOであると考えられる。というのは、JICAが行っている金がかかる協力は短期間に成果を求められ、評価される。短期間に成果が出にくい地域こそ、これからの技術協力のターゲットであり支援が必要であるからだ。

農業条件の不利な貧困地域では次の3点の配慮（ターゲット）が重要であろう。

- 1 燃料の確保（燃料とする、牛のフンすら足りない）
- 2 食料の不足（生後6ヶ月を生き延びた子供にしか名づけられないほど貧しい）
- 3 収入の確保

国境を越えて守る棚田、里山 - 山村塾・国際ワークの取り組み -

発表者

椿原 寿之 山村塾 代表

内容

山村塾とは、都市住民と農村住民との協力によって棚田や山林などの里山環境を保全しようとする団体である。活動場所は福岡県黒木町笠原地区である。活動は今年で10年を迎える。

山村塾には、稲作コースと山林コースがある。稲作コースでは、会員によって棚田での合鴨農法による稲作（合鴨水稲同時作、椿原氏曰く「合鴨養殖を行っていたらついでに米ができた」農業）を行っている。作業内容は、種まき、田植え、合鴨進水、草取り、合鴨の引き上げと赤米の花見、稲刈り、合鴨潰し、収穫祭と多岐にわたる。効率の悪い棚田での稲作を維持するためには、こうした都市住民の理解や協力が必要なのである。

山林コースでは、杉や檜だけでなく、多様な生態系の森づくりを行っている。作業内容は、枝打ち、間伐、炭焼き、植林等である。この山林コースは山村塾の主宰者の1人である宮園氏が担当している。

山村塾では、この他、土日を利用して里山保全活動を行うミニ・ワーキングホリデーや子どもたちを対象とした夏休みの「子どもキャンプ」も行っている。子どもキャンプでは、流しそうめんなどのアクティビティが盛り込まれている。子どもたちは自らの手で箸や汁入れを作り、流しそうめんを食べる。また、正月には竹のやぐらを組み、注連縄等と一緒に焼くという左義長というイベントも行われる。こうしたアクティビティ、イベントは、楽しいだけでなく、繁殖しすぎて森林生態系を脅かしている竹林

を制御するという意味もある。遊びを含んだ生活を保全に結びつけることが大切なのだ。

また国際里山田園保全ワーキングホリデーin福岡（以下、国際ワークと略）の取り組みは、第6回を数えた。国際ワークとは、10日間の合宿形式で、棚田の保全ボランティア（石積み）、山林の保全ボランティア（枝打ち、間伐、階段工）を行うというものである。ボランティアは国内外から、約30名が集まり、スタッフを含めると50名にもものぼる。

主な、海外参加者はイギリスのBTCVをはじめ、タイ、アルゼンチン、オランダ、フィリピン、韓国等のNGOスタッフである。環境保全の理念や技術、経験の共有を可能にしている。

こうした取り組みは、経済的交流だけでなく、農村環境の保全、精神的なつながりや、都市住民による農村のよさの理解、農村住民による農村のよさの再発見につながっている。なお、課題としては、地域内でのこうした取り組みに対する理解の深化、同じような取り組みを行うグループ間の連携等が挙げられる。

午後

グループ別ワークショップ

コーディネーターが、事例報告を聞きながらカードにキーワードを書き出し、それを模造紙に貼り付けて報告の内容の構造・流れなどを図式化していたので、午後は、まずそれを用いて午前中の事例報告の振り返りを行った。

ワークショップの形式

- (1)参加者を4つのグループに分ける。各自が「途上国の農業が抱える問題」のキーワードをカード1枚につき1点ずつ書きだす（枚数は自由）。具体的な国がイメージできる場合には、記述した課題の下に括弧つきで国名を書く。
- (2)グループ毎に、1人が1枚ずつカードを示し、その内容を発表する。具体的な経験がある場合には、その経験も発表する。
- (3)すべての発表が終わった後で、模造紙にカードを貼りだしグルーピングする（KJ法）。その際、グループ間での因果、相関などの関係も考える。
- (4)「日本の農業が抱える問題」というテーマで(2)～(3)と同じ手順を繰り返す。
- (5)できあがった「途上国の農業が抱える問題」「日本の農業が抱える問題」という成果物（模造紙）を2枚並べて、日本農業の問題と途上国農業の問題との関係性についてディスカッションする。
- (6)グループごとに発表する。



コーディネーターによる事例発表のまとめ



ワークショップの様子

ワークショップの内容

ワークショップは、グループ形式で行ったので、すべてのグループについて記録・報告を行うことは不可能である。そこで、ディスカッションの内容はB班に限って報告し、A・C・Dは成果物のみを示す。

途上国の農業が抱える問題（B班の例）

はじめの論点は、構造問題、経済格差等についてであった。「内戦によって働き手が少なく、また、都市に人が流出している『農業で収入を得ることはもはや難しい』日本の真似ばかりしては、社会システムに無理が生じる。伝統性を見直すべきではないか」と、体験談を交えつつ、積極的にそれぞれの意見を出し合っていた。

参加者の半分以上がいわゆる途上国と呼ばれる国へ行った経験があったので、現地へ行ったときのリアルな意見が多く飛び出し、情報交換に熱がこもった。その中の1つに、「生活の歪み」という問題がでた。

以前の貧しい村は、互いに不足部分を補い合って生き延びてきたが、先進国の不公平な援助の為、村間の関係が悪くなっていった。国にはそれぞれ風習、文化、価値観があり、一方的な援助では必ずしもプラスにはならないということだ。

それでは余計なおせっかいは控えたほうが良いのか、という意見も出たが、子供、特に女性が教育を受けることが出来るようになったという事実もある。様々な意見が出されたが、少ない時間では語り尽くせなかったようだった。

日本の農業が抱える問題（B班の例）

このテーマでは補助金制度を中心に話を広がっていった。

後継者補助は本当に必要なのか、農家の為の補助金は、スポーツセンターなどあまり重要性を感じられない。また、長期的な視点で見ると政策が一貫していない（以前は、みかんの木を植える為に補助金を使い、10年後にはその木を切る為に補助金を使っている等）。それに関連して、消費者は安全な食を求めているにもかかわらず、卸売業者は色のきれいな農薬りんごを買わざるを得ない矛盾、政府は目先の利を取っており、環境と農業との関係について、無理解ではないか、等。今回は、農業関係者が多く出席しているだけあって、身近な話題が中心となり厳しく討論されていた。

比較の結果（B班の例）

日本と世界の農業について共通していることは、大きく分けると「人」、「土」、「技術」、「金」、「農薬」の5つの課題がある、ということであった。そして、それぞれの分野において悪循環が発生しているのではないかと、というのが全体の見解であった。

また、日本と世界の2つの農業を比べることで、日本で表面化している課題が実は世界中に存在しているのではないかと、という意見も出た。



発表の様子

6 コーディネーターの所感

「途上国の農業が抱える問題」「日本の農業が抱える問題」、さらにそれを比較するという非常に大きな課題をテーマとしたワークショップであった。テーマが大きすぎて意見が出にくいのではないかと心配していたが、それは全くの杞憂であった。

どのグループも白熱した意見交換、議論が行われ、時間が足りないほどであった。それにもかかわらず、どのグループも時間内にきっちりと成果物を完成させて議論を集約した。このような理由から、非常に充実したワークショップとなったように思える。

国際協力も国際的な農業問題、国際的な環境問題も非常に大きなテーマである。だからといって全く手をつけないのではなく、多くの人々の知恵と経験を持ちより力を合わせれば、大きすぎてつかめなかった問題の構造や全体像も次第にはっきりしてくる。今回のワークショップの意義の一つは、そんな「協働」の力を再確認できたことであろう。

また、問題の構造、全体像を把握することは、自分の立場（ポジション）を明確にすることにつながる。立場（ポジション）が明確になれば、使命（ミッション）が明確になる。そして、行動（アクション）につながる。

世界を見つめながらNGO・NPO活動を持続的に行うこと、地域でのNGO・NPO活動の先に世界があること、今回のワークショップがそんなことを再確認するきっかけになればと思う。

7 記録者の所感

とても半日では語り尽くせないような壮大なテーマであったが、多くの人が集まることでこうも様々な意見が出て、濃密な時間が過ごせるものかと感激した。次々と途切れることなく意見が交わされ、時間が足りないほどであった。

今回の分科会のまとめとしては、先進国が援助活動を行うにあたって、途上国の生活や文化に対する無理解が、援助の効率を悪くしているようだった。

現地の体験談など貴重な話が数多く交換され、大成功だったと思う。

第3分科会

「共に守ろう、未来の地球（ほし）を！」

～ 私たちにできる環境保全～

日 時：2002年12月22日（日） 10：30～15：00

場 所：福岡天神ビル11階 6号室

第3分科会 「共に守ろう、未来の地球（ほし）を！」 ～ 私たちにできる環境保全～

1 コーディネーター

浜本 奈鼓 くすの木自然館 専務理事

2 リソースパーソン

高本師津雄 ODAの木協会（愛媛県小田町） 会長

金刺 順平 水俣浮浪雲工房 主宰

手塚 賢至 ヤッタネ調査隊（屋久島） 代表

3 参加人数

22名

4 分科会のねらい

昨今、環境破壊や汚染により、緑豊かな森林が失われつつあり、また、林業との兼ね合いもあり、自然と共によく共存していくことが必要となっている。本分科会では、日本国内での森林保全活動から、途上国での森林・自然保護活動の事例を通して、未来の環境を意識し、共通の課題、将来の協力関係、及び自分たちに今できることは何かについて考える。

5 分科会内容

午前

リソースパーソンによる事例紹介

林業の町が行ってきた町おこしと国際協力の活動紹介

発表者

高本師津雄 ODAの木協会（愛媛県小田町） 会長

内 容

愛媛県上浮穴郡小田町では、1992年から、行政の主導で「ODAの木プロジェクト」を5ヶ年計画でスタートさせた。プロジェクトの名前は、政府開発援助（ODA）をかけた小田町のローマ字表記と、小田町の主要産業である林業「木」をキーワードとしたものである。このプロジェクトは、住民自らがグローバルな視点に立ち、考え、行動することを目的とした教育・文化・地域づくりのプロジェクトである。具体的には、小田町の主幹産業である「林業」をベースに、地球環境問題に対する学習・教育

活動や、アジア太平洋地域を対象に留学生との国際交流事業、林業技術者受け入れ等の国際協力活動を行ってきた。

平成9年5月プロジェクト終了と同時に民間組織「ODAの木協会」を設立し、その活動は「ODAの木プロジェクト」から数えて現在10年目を迎えている。昨年1月には、「世界に開かれたまち」として総務大臣表彰を受賞した。

協会は、「国際化事業部」、「環境教育事業部」、「ブランド事業部」の3事業部に分かれている。

国際化事業部では「タイ国林業研修生受け入れ事業」、「ODAの木交流」、「聴講生受け入れ事業」、「国際交流のつどいインターナショナルフレンドシップフェスティバル」、「みどりの国際協力中学生タイ国派遣事業」等の事業を行っている。「みどりの国際協力中学生タイ国派遣事業」では、毎年町内の中学生5名を10日間タイへ派遣し、植林体験や研修、ホームステイを通じての交流を進めている。

環境教育事業部では、自然に親しみ地球環境を楽しみながら学ぶことをモットーに「ODAの木自然学校」を開いている。小田深山の大自然をフィールドとして、ネイチャーゲーム、ブナ林登山、林間教室、農作業体験などを行い、子供たちに自然について伝えている。

ブランド事業部では、小田町に存在する特産品をブランド化、販売し、ODAの木協会の財源の確保を図っている。1996年10月に開かれた「みどりの国際協力キャンペーン」では、味噌、醤油、うどんのほか、地元で採れた新鮮低農薬・無農薬野菜や、豆腐、こんにゃく、もち、カステラなどの加工品、炭・竹製品、草木染めなどを揃え販売した。また、ODAの木協会のPRやブランド事業部で考案した「森のこよみ」なども販売した。

アマゾン、ボルネオ、国内での環境共生活動と環境協力での課題

発表者

金刺 順平 水俣浮浪雲工房 主宰

内容

現在の日本において、漆や和紙のような素材を作り出す伝統工芸は、保護されない限り生き残っていくことが難しい。そうした厳しい状況の中で、紙漉き職人として生き残るためにも、身近な素材、足下にある素材を見直し始めた。15年前のことである。

たとえば、住環境や生活スタイルの変化に伴い、竹ざるや畳の需要は減少している。そこで、その原料の竹やい草を使い、和紙を作ることを思いついたのだ。

そうした取り組みを重ねるうちに、様々な相談が舞い込み、その中にはアマゾンやボルネオからの相談もあった。そして、紙漉きによる途上国支援の取り組みが始まった。

マレーシア国サラワク州は、日本への木材供給地であり、森林破壊は海岸から奥地

へと広がり続けている。森林の破壊は、現地に住む少数民族の生活環境の破壊をもたらすが、それでもなお、その少数民族は、木を切り倒し、海外への販売をすすめようとしている。他に現金収入を得る術がないのである。

そこで、その少数民族に紙漉技術を教えることで、新しい現金収入の道を作り、少数民族の経済的な自立と森林の保全を同時に図ろうとしているのである。しかし、紙漉に必要な道具は高価なため、簡単に寄付することができない。それゆえ、現地の人々はまず道具を作ることから始めている。

アマゾンでは貧困と砂漠化が進んでいる。それゆえ、貧困と環境問題の解決を同時に図る技術、環境共生の技術が必要である。アマゾンにはインディオの環境共生の技術、知恵があったが、現在の人々はその知恵を知らない。そこで、その技術、知恵を掘り起こし、今の時代に適した形でその技術、知恵を再構築し、製品の生産に活かすような活動を行っている。それにより、労働の場を作り、環境破壊に歯止めをかけようとしているのだ。

総じて言えば、廃棄物や未利用資源を見直し、その特性や伝統的な方法を活用して、今の暮らしに役立つものを作り出すための手助けをしている。



事例発表の様子

民・官・学共働の保全活動と海外NGOとの交流

発表者

手塚 賢至 ヤッタネ調査隊（屋久島） 代表

内 容

現在、屋久島は島の面積の約20%が世界自然遺産に登録されている。その中に屋久島と種子島にしか生息していないヤクタネゴヨウがある。ヤクタネゴヨウはマツ科マツ属の常緑高木で、台湾の山地に分布するタカネゴヨウと、中国中央部に広く分布するカザンマツの変種とされている。屋久島には3ヶ所に1,000~2,000本しか自生せず、レッドデータブックに「絶滅危惧種」に指定されている。

ヤクタネゴヨウは他の種類の木に負けて枯れたり、白骨化してしまうことが多い。そうして、自生地域は岩盤や岩壁へ追いやられ、40~45度の傾斜に生えている場合が多い。ヤッタネ調査隊では、測量に基づいてヤクタネゴヨウの正確な位置を把握し、直径、樹高を計測し、健康状態などを調査している。特に次世代を担う幼樹の確認は重要である。この調査によって屋久島、種子島に現存するヤクタネゴヨウの全容が把握でき、今後の保護対策に生かされると考えられる。

この活動は毎月1回行われ、3年半ほど続き、延べ380名以上が参加している。この調査結果は公表され、民・官・学が共に守っていこうと活動を続けている。この活動を島内外へ示すことにより、生物種の絶滅に対する意識を高めることにもなるであろう。

一方、タイには、大型の鳥類、サイチョウが生息している。サイチョウは巨木の洞で繁殖するため、森林の伐採の影響を受けやすい。また飼鳥としての捕獲も個体数の減少の原因となっている。2亜種が知られ、マレー半島、スマトラ産の亜種が5,000~10,000羽、基亜種は2,500羽以下とされる。このような理由からサイチョウは国際保護鳥となっているが、現地の人々は今までそれを主に経済的な理由で密猟して高価で取り引きされる非合法的ルートで売ったり、食料としていたという背景がある。そこで、サイチョウを保護するため、現地の人をその調査員として雇い、サイチョウや自分自身が住む森を守っていくことにつなげている。こうした取り組みを支援するため、日本からサイチョウのエコツアーを企画したり、協力体制を整えつつある。

ケニアのカカメガには、ケニアに唯一残された熱帯林がある。現地では、その森を守っていくためにエコツアーやKEEPと呼ばれる環境教育プログラムが行われている。コンゴ民主共和国では、現地のNGOによってエコツアーを中心に、ゴリラとゴリラの森の保護が行われている。実際に私達はアフリカを訪問し、また日本に関係者を招待することで、森林という人類共通の宝を通じた民間の国際交流を行っている。

午後

参加者を含めたディスカッション

リソースパーソンごとに参加者が3グループに分かれ、前半は午前中の事例発表についての質疑応答及び意見交換を行った。その後、グループを入れ替えての後半は、リソースパーソンの各テーマに基づいたディスカッションを行った。主な内容は次のとおりである。

グループ別ディスカッション（後半）

高本氏グループ（テーマ：環境保全）

環境を保全するためには、まず個々の意識改革が大事であるが、それが一番難しい。できること、つまり自分自身の意識を変えていくことが必要である。一方で、環境省、外務省などの官の理解も重要になってくる。そのために、個人の活動内容は小さいことでも、目標は大きく掲げ、国（官）への働きかけを徐々に行っていくべきだろう。環境教育事業参加者がサポーターとなることで、その働きかけがより円滑に進むと思われる。

金刺氏グループ（テーマ：環境共生な暮らし）

環境共生の英訳は、自然と共に生きるという言い方で代替しているが、そもそも外国に環境共生といった概念がないので説明するのが難しい。共生とは生きることを肯定しつつ、なおかつ自然も守らなければならないという概念である。

しかし、その環境共生という言葉がある日本では、環境共生ができていない。自給率が低いことから考えられるように、身近な物を使いきれていないことが原因のひとつではないだろうか。環境共生ができていた昔は、全てのものが国内で循環していただろう。日本はもっと変わっていく必要があるのではないだろうか。

手塚氏グループ（テーマ：生物多様性の保護、民間の国際協力）

生物多様性の保護の一例として、間接的ではあるが、ケニアの環境教育が挙げられる。ケニアの地元の人々は、薪用の木を切ることで生活圏を狭め、結局自分自身の生活を苦しめることになっている。そこで、ケニアの環境教育では森を守ることが生活を守ることに繋がっているということをお子たちに教えている。

民間の国際協力では、民間との付き合いに重点を置きながら、個と個のつながりを大切にしていくことが必要だろう。どうしたら森を守ることができるのか、本音で語り合うことが大切である。



グループ別ディスカッション

この後、最後に全員で輪になり、この分科会のテーマに関するディスカッションが行われた。

全員によるディスカッション

海外に日本の技術を伝えようとする場合には、現地の現状に適した方法に変えることが重要である。日本の環境共生などの概念を直輸出することはできない。

また、生産物はその地域内で使用することも重要である。これは日本国内においても同様に重要な問題である。

我々日本人はもっと足下を見直し、伝統の知恵を活用していく中で、環境保全の活動を世界へと広げていくことが大切なことではないのだろうか。まず、私たちそれぞれが、自分の立場で自分にできることを自分の周りから始める行動が、未来の地球を守る最短距離であるかもしれない。



全員によるディスカッション

6 コーディネーターの所感

環境保全・環境再生などの様々な活動は、国境や文化を越えて、最重要課題だと思います。理論や議論ばかりに傾きがちで、実践を伴う活動は、本当に難しいことだと感じますが、「まず実行ありき」で、実践した結果が、次の活動の方向を導いてくれるのだと信じています。今回のワークショップでも、「実践」の中にある問題点や方向性が、未来に繋がることを、多方面から形づけていただいたのではないかと思います。参加された方々のこれからの実践力に大きく期待しています。

7 記録者の所感

午後からのグループ別の質問、ディスカッションでは、参加者が自分の経験を交えながらの問いかけや意見交換が活発に行われ、時間内では話し終えることができないほどだった。地球、環境、国際協力という非常に大きなテーマであったので、具体的な結論を求めるようなワークショップではなかったが、参加者は、それぞれの生活や活動に対して、新たな視点からアプローチするきっかけが見出せたのではないだろうか。

第4分科会

「生きる力」をはぐくむ教育」

～こどもと女性の未来に思いをよせて～

日 時：2002年12月22日(日) 10:30～15:00

場 所：福岡天神ビル11階 11号室

第4分科会 「生きる力」をはぐくむ教育 ～こどもと女性の未来に思いをよせて～

1 コーディネーター

中村 清美 ワールドスタディーズセンター主宰

2 リソースパーソン

秋尾 晃正 日本民際交流センター代表

エラリー・ジャンクリストフ NPO法人セカンド・ハンド スタッフ

丸野 里美 JICA九州国際センター国際協力推進員（鹿児島）

3 参加人数

65名

4 分科会のねらい

教育は社会と国家を発展させる源泉だといってよい。公正な社会を作るためには、教育によって考える力、生きる力をはぐくみ、人間誰もが潜在的に持っている「知」を開眼させることである。その教育によって開かれる可能性に焦点を当て、様々な支援を行っている事例を紹介し、活動の上で共通する課題、問題解決方法、将来への可能性を共有する。

また、「生きる力」をキーワードに、世界と日本の教育問題にどのように取り組むのか、世界を、日本をつなぐ開発教育・国際理解教育を通して、参加者と一緒に考える。

5 分科会内容

午前

アイスブレイク

「最近一番笑ったこと」参加者は座席の前後で4人のグループを作り話し合った。始めは戸惑っていたが、それぞれの話を聞くうちに、笑顔がこぼれるようになった。

その後、3つのグループが、一番面白かった話を参加者全員の前で発表。最も会場の笑いを誘ったのは「ある講演会で70歳のおじいさんが、いびきをかいてずっと寝ていたのに、講演会が終わるとすぐに質問をしていた。」という発表。

事例紹介に入る前に、中村氏から、この分科会の話題の軸となる「国際理解教育」「開発教育」という用語についての説明があった。この2つのキーワードの基本となる「公

「正な社会づくりとそのための教育」という考え方を参加者全員で確認した。



アイスブレイクの様子

リソースパーソンによる事例紹介

フェアトレードで女性達の自立支援 - カンボジア職業訓練プロジェクト -
発表者

エラリー・ジャンクリストフ

NPO法人セカンド・ハンド ボランティアスタッフ

内 容

セカンド・ハンドは、チャリティーショップ「セカンド・ハンド」で支援者から無料提供された衣類や生活用品を販売し、その収益金すべてを途上国の援助にあてている。主にカンボジアでの学校建設（小学校9校、現在10校目を建設中）や識字教育など、教育支援を行っている。また、カンボジアの地雷による障害者など、経済的、社会的に立場の弱い人々を作る商品を現地のNGOから輸入・販売することで、その自立を支援している。店舗や倉庫は無料で借り、店番などの活動は無償のボランティアスタッフが支えている。

また、セカンド・ハンドは、毎年1回～2回、支援先の視察と交流のため、カンボジアへのスタディーツアーを実施している。そのスタディーツアーでジャン氏はカンボジアのある小学校の開校式を訪問した。その小学校の子どもの家庭を訪れた時、貧困問題や教育問題の根元が、女性に仕事がないことであるということがわかった。「仕

事がない」「お金がない」「子どもたちは学校に行けない」「子どもは仕事をしなくてはならない」という構造を生み出しているのだ。つまり、小学校という建物を建設しても、そこに子どもを通わせるための社会システムの整備が不十分で、教育支援が有効に行われないのである。

この問題を解決しようと、女性の職業訓練の支援を構想した。始めるにあたって、基礎調査、訓練のための敷地、指導者、建物、道具（足踏みミシン）の手配等に苦労した。職業訓練を受けたい女性募集・選定は地域のことをよく知る地元の小学校の先生に依頼した。指導者については女性の自立を支援するバタンバン州のNGO「ラチャナ・ハンディクラフト・バタンバン」の協力を得た。敷地はある寺院からの提供を受けた。建物は、政府等の援助を得るのではなく、現地のNGOと協力して建設することになった。足踏みミシンは120台を日本で探し、現在、現地に送るためのチェックを行っている（1996年10月にはカンボジアに足踏みミシン35台を送る等の実績がある。電気が通っていない、もしくは電力供給が不安定なため、電気を使わない足踏みミシンが最適である。）

一つの課題は、職業訓練を受ける女性の選定基準である。「貧しいから…」というだけで選定するのではなく、訓練後に地域のリーダーとなれるような個性豊かな人材にまず訓練を受けさせるべきである。セカンド・ハンドでは、ラチャナと協力して、ただ貧しいだけでなく、英語ができる、以前ミシンを使っていた等の技能を持った人材を選定している。

このような職業訓練校建設、ミシンの輸送には約1,200万円必要であるが、その経済的基盤となっているのが、チャリティーショップでの売り上げである。しかし、課題はある。それは、お店で働いているスタッフの認識の差が大きいことである。

ただ「(暇つぶし程度に)ボランティアをやっている」という考え方ではなく、「カンボジアの支援を私たちが行っている、私たちがやらなくては」という認識を持ってお店で働いてほしい。その為にも、スタディーツアー等、ボランティアスタッフが現地を訪問する機会を設け、この人々の生活を支えているという認識を持ってもらうことが重要である。それにより、世界に向けた活動をしているという認識が生まれ、カンボジアの支援活動に深い理解が生まれるようになるだろう。それによって、セカンド・ハンドのボランティアスタッフの、日本社会における自らの活動の位置づけや役割に関する考え方が変わればと思っている。



事例発表の様子

お母さんたちが識字教育を始めた理由

- カンボジア農村開発プロジェクトの中で -

発表者

丸野 里美 JICA九州国際センター国際協力推進員（鹿児島）

内 容

まず、カンボジアの識字教室の現場の写真を見せ、参加者が気づいたことを挙げた。「教科書が手刷り」「机、いすがない」「ノートでなく黒板を利用」等。最後に出た「女性が多い」。

これこそ、今回の事例発表のキーワードである。

これは、丸野氏が、青年海外協力隊小学校教諭隊員として1995年から3年間、カンボジアでの教育分野の活動、特に識字教育に携わった頃の写真である。この識字教育は三角協力プロジェクトの一つ。三角協力プロジェクトとは、カンボジアの農村開発¹を目的に、（日本の技術がそのまま有効ではないので）条件の似ているタイ、マレーシア、フィリピン、インドネシアの技術者を専門家として派遣し、その経費を日本が負担するというプロジェクトである。

識字教育を始めたきっかけは、カンボジアでの中学校建設に際して、生徒の保護者、

¹農村開発プロジェクトには、農業技術、保健衛生、収入向上、教育という4つの分野があった。識字教育は教育分野のプロジェクトに含まれる。

特に母親からの意見が聞こえてこないことにあった。母親は、楽しいおしゃべりはするが、会議などになると意見を出さない。それを不思議に思い3ヶ月かけて調べてみると、母親が読み書きをできないことにあることがわかった。「読み書きができない」「考えることができない」「意見が言えない」という現状があったのだ。

そこで、母親や女性を対象とした識字教育を始めた。第一の課題は、夫や村長の理解を得ることであった。カウンターパートが若い男性であったため夫が(男女の仲を)疑ったり、また、村長の理解がないと村での取り組みが持続しない。そこで、村長、僧侶など数多くの人々を巻き込み、識字教育の重要性を理解してもらうための啓発活動を繰り返した。

識字教育で最も重要なのは、「先生探し」である。村人が信頼できる先生、先生の家族も不安を覚えないような先生の選定が重要なのである。識字教育に取り組んだ3つ目の村では、村長自らが先生となった。

(この村での取り組みを紹介する4分間のビデオ)

この村長は、「女性が読み書きできることは、子どもや孫、村全体によい影響を与える」と語った。この村の取り組みを、他の村の手本とすることで、他の村でもスムーズに識字教育に取り組めるようになった。

カンボジアでは多くの経験や感動を得ることができた。

識字教育の修了者にプレゼントとして、ほしいものを訪ねたところ、30代以上の女性から「経典」といわれ、衝撃を受けた。「この校舎は、自分を未来へとつなぐ橋なのだ」という中学生が自分の思いを歌にし、それを聞き感激を覚えた。また収入などの条件が整えば、多くの生徒たちが、学校の先生になって弟たち(血のつながっていない後輩も含む)に勉強を教えたいという希望を持っていることも知った。

この経験を日本の子どもたちに伝えることで、日本の子どもたちが何かを感じ取り、国際理解教育に役立てばと願っている。

ごめいさん！そろばんが広げる子どもたちの未来

- 日本とタイを結んだそろばん教育 -

発表者

秋尾 晃正 日本国際交流センター 代表

内 容

バンコクで食事をしている時、ウェイトレスに秋尾氏の年齢を当てさせた。ウェイトレスは、30歳と答えた。同じく、同席の男性の年を当てさせると、20歳と答えた。そしてそのウェイトレスは、「あなた(秋尾氏)はこの人(同僚)のお父さんですか?」と聞いた。10歳のときにできた子どもとは…。そんな簡単な計算ができないのがタイの現実であり、非常に悲しい話でもある。

日本国際センター(以下、国際センターと略)の活動は、大きく分けて教育援助と

地域開発援助である。

教育には、学校（建物）、生徒、先生が必要である。民際センターでは学校施設整備事業として、ラオスでの学校建設、図書事業、給食整備事業、学校を通じたの保健事業、タイでの図書事業を行っている。次に生徒に対する支援事業として、進学率の向上を目指し、ラオス、タイで奨学金事業を行っている。先生に対する支援事業には、現場の先生の能力向上研修や、国家的指導員の育成等がある。

Education for Allという概念から、奨学金と車いすをセットにして障害者に提供し、通学路の整備を行うなど、障害者を含めたすべての子どもを対象にした教育支援が基本理念の一つである。日本の400の小中学校もこの運動に参加している。

現地主義の理念を持ち、学校の経営を含め全ての事を現地の人々が行うようにしている。もう一つの特筆事項は、いかにして管理費を抑えるかということである。支援事業は、現地の地方自治体と連携して展開しているが、例えば、各県の教育委員会が事務局をボランティアで運営してくれている。その下の郡の教育委員会もボランティアに加わっている。現在、2,000の村、2,000の小学校に奨学金等を提供している。これらの行政のボランティア数はタイだけで約3,000を超え、これにより運営費を削減できている。

これにより、費用対効果、効率性、コスト計算等をしっかりと行っている、また、県同士で競争しあうようになり、さらに効果が上がるようになる。

基本的には、現地の人々が主体となり、日本人はそのサポートを行うという形態である。

これから新たな土地で支援事業を行う場合には、現地のNGOとのコラボレーションを考えている。

日本人の役目とは何か。事業というのは計画、実施、評価という3つの重要なものがある。NGOで働く人たちは、「コンダクター」でも「プレイヤー」でもなく、それらの人々を選定し、どのような音楽を奏でるかを決める「プロデューサー」である。思想家であれ、運動家であれ、事業家であれと考えている。

民際センターの現在の予算規模は2億3,000万円程度。初年度は41万円、次年度は600万円であった。2億3,000万円を巨額だと評価する人もいるが、欧米大手NGOの予算規模は800億以上、300億～500億で中堅、2億程度は小さなNGOである。日本のNGOは、事業規模が欧米に比べてまだまだ小さく、それはNGOに対する認知度が低いためである。

そろばん教育について。日本の読み・書き・そろばんという概念はすばらしい。そろばん勘定ができることによって、毎日の生活のやりくりの基盤をしっかりとさせることができる。母親がやりくりさえできれば、娘を身売りに出したりすることはなくなる。その理念と情熱の下、そろばん教育を始めた。奇想（そろばんを国際協力に）、空想（英語のできない日本人ができること）、理想（理論的な総合計画）、熱望（情熱

を持ってうったえかけていく)の考えを持っている。

1994年から島根県・横田町(雲州そろばん)とタイでそろばん教育を始め、1997年にタイ教育省に国家そろばん委員会ができた。タイの小学校35,000校で、小学校3年生からそろばん導入ということに決まった。

そろばんを普及させるにあたっての課題は、教材(教科書とそろばん)と教師の育成であった。教科書は日本のものをタイ語に翻訳した。そろばん確保の方法は2つ。使用されていないものを島根県の国際交流協会が窓口となり収集。また、そろばんオーナー制度により確保した。教師の育成は、毎年タイの教育省から2名国家指導員を島根県で受け入れ、1級を持って帰国させる。またタイの教育省と10年総合計画を立案し、その中で、国際協力事業団(JICA)のシニア海外ボランティアで先生を派遣、2年間で県教育区で教師のトレーニングを行っている。

この事業を通して、事業を推進するには、知識(情報収集)・認識(何が正しいか判断)・見識(現地の人との相互理解)が大切であると考えられるようになった。

現在タイの2,000校で先生が育っている。今後はタイの先生たちがイニシアチブをもって、ラオス、カンボジアに将来、そろばん教育を普及させていけばよいと思う。

日本の教育の原点も、読み・書き・そろばんなのである。

コーディネーターによる質問

中村氏から、リソースパーソン3人へ「日本の教育の問題とは？」という質問が投げかけられた。それに対して、3人からは次のような回答が得られた。

- ・丸野氏 - カンボジアでは、子どもたちが方向性を持っている。日本の子どもたちは、何のために勉強しているのかという方向性が見えていないのではないかと思う。
子どもたちに伝えたいことは「当たり前ことは当たり前でない。」
- ・ジャン氏 - 今行っていることしか見えていない。自分がやっていることがどのようにつながっていくのか、その先を認識してほしい。
- ・秋尾氏 - 活動が形骸化してしまっている。やる気のある先生たちが転勤することによって、広がりがあればと思う。

事例紹介の後、参加者が付箋紙にそれぞれ書き出すという方法で、午後から話し合いたいテーマを抽出した。

午後

グループ別ディスカッション

午前中出されたテーマを6つのカテゴリーに大分し、7つのグループに分かれてそれぞれの選んだテーマでグループディスカッションを行った。

グループによって、ディスカッションの方法は異なったが、どのグループでも積極的な意見が交わされていた。以下に、各グループの意見・発表を抜粋して報告する。

①学校教育の中で、国際理解にどう取り組むか
(グループ1)

学校の中での国際理解教育の必要性について議論した。その中で、国際理解は身近なものであることに気がついた。また、国際理解とは、違いを違いとして認め、理解しあうことだと思った。最後に、学校教育の課題として、教える側の意識、教え方の問題、情報を知ること自体の重要性、が挙げられた。

(グループ2)

子どもたちの国際理解力のなさは、感受性が失われていることに原因の一つがあるのではないだろうか。相手を思いやるという感受性が、国際理解力の基礎になるのだと思う。また、教師側も、きちんと国際理解について学ばなくてはならない。国際理解とは、違った価値観を認め合うことである。それは、身近なところから始める必要がある。

②現地NGOとの連携

連携を円滑に進めるには、一方的に押し付けないことが大切。相手側の文化を理解し、提供しようとする技術・ノウハウを、その国の実態に適應させることが重要である。現地では支援より協力が必要で、情報を公開しあい協力することが、現地の発展につながる。

生きる力とは、希望を抱くことのできる力であり、希望を見つけることのできるような手助けが、海外で必要なのではないか。

③日本人ができる本当の国際協力

まず、私たちが取り組んでいる活動の問題点について話し合った。その中で、「日本人」ができることと、「私」ができることとは違う、という結論に達した。「日本人」「私」それぞれの立場でできること、それぞれの立場の強いところを、発揮すればよいのではないかと考える。

生きる力は、豊富な情報の中で正しいものを判断する力や、臨機応変に対応する力、大切なものを見極める力だと思う。ここに来て話し合っていることも、生きる力を身につけるための一つの過程ではないかと考える。

④貧困の連鎖を断ち切る協力

現実と現場にあった援助が何より重要であり、その為には、実情を知ることが最も必要である。実情を知った上で、物資そのものを援助するのではなく、生活の基

盤となるノウハウを伝えることが、貧困からの脱却につながるのではないかと思う。

⑤日本における国際理解教育

まず、国際理解教育という用語そのものについて、議論した。国際理解では、同じ目線に立つことの重要性を確認した。

国際理解教育とは、視線を世界に向け、世界の現状や異文化を理解することで、日本という国を再認識することであると考えた。

⑥女性と子どもの基礎能力を高める教育

まず、「考えることができない女性」が「考えることができる」ようにするための方法について議論した。一つの結論は、基礎教育を身に着けることであった。更に、「基礎教育を身に着けるための方法」について議論を深めた。

この話し合いを通して、「生きる力」＝「基礎能力（教育）」なのではないかと考えた。自分の役割に気づき知ること、コミュニケーション能力といった基礎能力が、生きる力だと考えられる。



グループ別ディスカッション

6 コーディネーターの所感

この分科会をきっかけに、それぞれが「生きる力」について考える機会を持つようになればと思う。出会いが生きる力を育む場である。今日の出会いが、生きる力を育む一つの過程になることを望んでいる。

7 記録者の所感

アイスブレイクや、午後のディスカッションの盛り上がりを見て、参加者の意識の高さがうかがえた。

この分科会をきっかけに、改めて「生きる力」について考えてみると、私にとっての生きる力とは、人が人として生きていく力、と考えられる。字が読め、計算ができれば、考えることができない。逆に、字が読めれば仕事に就くことができ、その仕事によって生活を営むことができる、生きがいを見つけることができる。つまり、識字という基本的な力が、生きがいさえも左右するのである。

これが生きる力であり、この分科会のリソースパーソンの活動を支える想い、訴えたいことではないだろうか。

また、この分科会をきっかけに、国際理解についても改めて考え直すことができた。その原理は、お互いの文化の違いを違いとして認め合うことであり、これは人の違いを認め合うこととも同様である。そして、違いを違いとして認め合う個人の心の豊かさも、生きる力の大きな要因をなすと考えられる。

このように考えれば、国際理解が生きる力へとつながり、生きる力が国際協力の糧となる。国内・海外で国際的な問題を解決するための一つのキーワードとなるのが、「生きる力」開発教育であると考えられる。

第5分科会

「南のパートナーとの協力関係づくり」

～南のNGOとのパートナーシップを考える～

日 時：2002年12月22日(日) 10:30～15:00

場 所：福岡天神ビル11階 8号室

第5分科会 南のパートナーとの協力関係づくり ～南のNGOとのパートナーシップを考える～

1 コーディネーター

重田 康博 JVC九州ネットワーク代表/九州国際大学国際商学部教員

2 リソースパーソン

矢野 孝明 バングラデシュと手をつなぐ会 前現地駐在員

鶴田 厚子 セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン 前事務局長

笛吹 弦 JICA九州国際センター 職員

3 参加人数

44名

4 分科会のねらい

国際協力の現場では、南のパートナー団体（NGO、住民組織など）との協力関係が重要になってきている。この分科会では、日本のNGOやJICAと南のパートナー団体が、単なる「援助する側」と「援助される側」の関係性を超えて、「どのような協力関係づくり（パートナーシップ）を行えば良いのか、NGOやJICAの事例を実際に紹介しながら、南のNGOとのパートナーシップについて考える。

5 分科会内容

午前：リソースパーソンによる事例紹介

バングラデシュと手をつなぐ会による

南のNGOとの協力関係づくりの経験から

発表者

矢野 孝明 バングラデシュと手をつなぐ会 前現地駐在員

内 容

バングラデシュは、国民所得、乳幼児死亡率、平均寿命、成人識字率のどの統計資料をとっても世界でもっとも貧しく「開発」の遅れた国である。さらに、深刻な人口問題、自然災害、経済的損害、難民問題などの重荷がのしかかっている。

バングラデシュと手をつなぐ会は、1989年より、このようなバングラデシュのカラムディ村を中心に、母子保健センターの運営、巡回検診、保健指導、ビレッジ・ドクター（正式な資格を持たない伝統的な医療従事者）への研修、学校運営、奨学金の付

与、職業訓練などの医療と教育を軸にした協力活動を展開している。これらの活動は、日本側からの支援の受け皿となる現地のNGOとして設立した「シヨンドニ・シヨNSTA」が企画を担い、日本側が資金を負担している。

しかし、現地の伝統や宗教などの村の在村性と近代化の摩擦、政治的影響、経済的問題、日本と現地とのプロジェクトに対する意識のギャップ、スタッフ同士のコミュニケーション不足などによりプロジェクトが遅々として進まない状況もあり、矢野氏が現地駐在員として派遣された。

矢野氏はバングラデシュでの経験から、パートナーとしての二国間のあり方を、主体性、在村性、協力という三つのキーワードを挙げた。具体的には、現地の人々の目線に合わせることによって対象地域のニーズが見えてくること、現地では「援助への依存」という風潮が助長するかたちで二国間での「援助の垂れ流し」という現実が存在すること、最後に、国際協力に対する作り上げられた美意識によって発展途上国と先進国という構図を知らぬ間に強固なものにしているの、一歩進んだ国際協力に対する意識向上・変革が必要ではないかとパートナーシップのあり方を提言した。

セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン (SCJ) による

南のNGOとの協力関係づくりの経験から

発表者

鶴田 厚子 セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン 前事務局長

内 容

鶴田氏は、青年海外協力隊でタイで働いたことがあったため、SCJがタイ事務所を開き、事業を開始する役割を担った。まずは団体内で、タイ事務所には日本人駐在員は不要なこと、バンコクで事務所を開かないこと、タイNGOとのパートナーシップで事業を行うことなどの基本方針を承認してもらった。それから、SCJのタイでもニッチを探るため、タイのNGO、INGO の調査を行った。結果、コンケンにタイ人だけの事務所を開き、東北タイで地域に根ざした子ども対象の事業を行っているタイNGOをパートナーとして事業を行うことを決定。

タイ事務所は最初の1年間をアクションリサーチの期間として、パートナーになるべきタイNGO探しに力を注いだ。東北タイで、ボランティア的に活動し、すでに実績をあげている人たちと出会い、その人たち(4グループ)とパートナーシップを組むことになった。

SCJの役割は、パートナーNGOの資金援助と精神的、技術的サポートである。技術的サポートとは、現地NGOスタッフがビジョンを共有し、長期的・中期的計画書を作成し、年度別の事業計画や予算書作成をするワークショップを指導し(SCJスタッフがファシリテーター役を務めた)、会計監理、報告書の作成、ファンドレイジングの技術指導などである。

タイ事業は2001年3月で終了しており、結果的に目的を達成したと評価している。課題としては、個人的コミットメントがキーである半面、団体としての組織化、制度化、情報蓄積が弱いことである。この事業から学んだこととして、どんな事業でも言えることだが、あくまで現地の人々・NGOの事業のオーナーシップにこだわること、事前の基礎調査が大切であること、資金、技術だけでなく、ビジョンを共有し、人間として「心の支え」が大切であること等である。



事例発表の様子

JICAのパートナーシップの経験から

発表者

笛吹 弦 JICA九州国際センター 職員

内容

1990年代に入り、開発援助が「人間中心の開発」というキーワードの下に行われるようになった。また、外務省が、各国大使館を通して、草の根無償という名で一口1,000万円程度のハード面の支援資金を提供し始め、笛吹氏はJICAの活動としてソフト面での支援の必要性を感じていた。そこでJICAは、1997年の経済危機にあったタイ政府より弱者支援の強化を要請されたのを契機に、特に貧困層、女性、子どもを対象にしたソフト面での支援を行うことになった。

しかし、JICA単独の事業では政府ベースのトップダウンの支援しかできず、末端にいる人達に支援の効果が現れるのに時間がかかるため、現地NGOと一緒にやって事業を行うことを考えた。そこで、タイのNGOの中から、パートナーとして日本人

が常駐しているシーカ・アジア財団とラックス・タイ財団、青年海外協力隊員の派遣をしていたタイ障害児財団とともにJICAの開発福祉支援事業を通して連携することになった。

その中の、JICAがシーカ・アジア財団（現 シャンティ国際ボランティア会）とバンコク市内のスラムを対象に行った、衛生・環境改善事業の中から「ゴミを緑にかえよう」と銘打って行われた緑化事業についてVTRを交えて紹介した。そして、この事業の反省点として、JICAのナショナルスタッフを上手に活用できていなかったことを挙げ、今後は日本の外務省やJICAの方針を勉強してもらい、即戦力として活用し、南のNGOとの連携を考えていきたいと締めくくった。

午後

アイスブレイク

参加者、リソースパーソンが自由に3グループに分かれ、アイスブレイクを行った。

①パートナーシップで大切なもの（例えば、夫婦や恋人などの関係で日々どのようなことが重要か）②国際協力にとってどのようなパートナーシップが必要か、という二点について、キーワードをA4用紙に各自書き出し、グループ内の2、3人で自己紹介をし、お互いの意見を照らし合わせた。

その後、全体の意見を取りまとめたところ、「パートナーシップで大切なもの」として、お互いの信頼関係、上下関係ではなく対等な関係、相手への理解、コミュニケーション、等が挙げられた。

また、「国際協力にとってどのようなパートナーシップが必要か」という点については、相互理解、自己実現、独立性、主体性、共通の目的、役割分担の明確化などが挙げられた。日頃から、国際協力に携わっている参加者が多く、テーマについて具体的な議論が交わされた。

グループ別ディスカッション

3つのグループに分かれ、午前中にリソースパーソンが紹介した事例をもとに、3つのテーマが提示された。各グループにリソースパーソンがそれぞれ加わり、自己紹介やリソースパーソンへの質問の後、それぞれのテーマに沿って付箋紙にキーワードを書き込み、KJ法を用いてお互いの意見をグループごとにまとめた。

各グループのテーマとディスカッションの内容の抜粋は以下のとおりである。

テーマ1：パートナーとの活動理由（パートナーの選択、活動理念など）

リソースパーソン：鶴田厚子さん 司会者：高村さん（参加者）

まず、全体に共通するビジョンとして、自分の考えを相手にしっかり伝え、相手のことを理解するためにも、同じ目線でじっくり話し合える場が大切である、違う文化や習慣を尊重し、そのまま違いを認め合うことが、理解につながり、パートナーとの信頼関係ができ、目標達成につながる等の意見が出された。

次に、パートナー探しにおいては、理解・興味を持てる人を探すことや存在のアピールが重要となる。そして、パートナーに対する姿勢・態度としては、できるだけ相手と同じ視点に立つことや、お互いを理解し合えるように育てあうことが必要である。さらに、問題点として、パートナーの選択や良好なパートナーシップを築くには時間がかかること、スタッフの言語能力やプロジェクトのマネジメント能力が必要とされることが挙げられた。

テーマ2：プロジェクトの継続性

リソースパーソン：笛吹弦さん 司会者：坂梨さん（参加者）

プロジェクトの持続性を保つために必要なこととして、順に、体力と志、プロジェクト対象の選択、プロジェクトの目標や計画、手段の明確化、資金力や資金運用能力、予備調査や事業計画、現地の問題やニーズの把握のためのネットワーク・ビルディング、役割分担などの準備、マネジメント能力などの組織の育成、現地スタッフや現地スタッフを指導する人材の育成、団体同士やスタッフ同士の相互理解、プロジェクトの長期監視体制の構築が重要であるという結論となった。

テーマ3：協力関係づくり（パートナーシップ）の問題点

リソースパーソン：矢野孝明さん 司会者：河村さん（参加者）

結論として、相互理解を促進するためには現地の状況の把握、支援する側と受ける側のニーズの違いの認識、現地と日本の意思疎通などが必要である。しかし、支援される側は支援する側をあまり理解しようとはしていないので、相互理解といっても、実は一方通行であるという手厳しい意見が出された。

また、人材育成、人材発掘、情報ネットワーク、現地スタッフの選定などの現地の協力体制やマネジメント能力、長期的、具体的な目標設定や成果測定の難しさなどの援助する側の問題点が指摘された。



グループ別ディスカッション



ワークショップの発表

6 コーディネーターの所感

この分科会では、「南のNGOとの協力関係づくり（パートナーシップ）を考える分科会であった。国際協力の世界では度々パートナーシップという用語を使うが、それが具体的にどのような意味や内容をもつものなのか、参加者の中でのその解釈は人それぞれであったであろう。しかし、矢野氏、鶴田氏、笛吹氏の3人のリソースパーソンから、各自が考えるパートナーシップについてご説明いただき、多くの参加者もパートナーシップの考え方を一応共有できたのではないだろうか。パートナーシップは支援する側の一方通行という意見もあったが、支援される側すなわち南のパートナー団体や住民の「参加意識、主体性、自立性」をどのように高めていけばよいのか、これは「援助する側」と「援助される側」の関係性や依存性を克服していくための永遠の課題であり、今後も試行錯誤して克服していかなければいけない課題である。この点に、南のNGOとのパートナーシップにおける成功の鍵が隠されているような気がした。

最後に、パートナーシップを考えるという難しいテーマにも拘らず、予想に反して多くの参加者が分科会に集まり、会場からもほとぼしる熱気が感じられた。特に、時間に余裕がなく、会場が狭かったことはお詫び申し上げたい。アイスブレイキングの後、質疑応答が長くなりワークショップの時間が短くなってしまったことは今後の課題である。

7 記録者の所感

第5分科会は「南のパートナーとの協力関係づくり」というテーマの下に、午前午後を通して具体的な議論が交わされ、大変興味深いものだった。その中でも、特に、午後の部のアイスブレイキングの際、国際協力にとって良いパートナーシップを保つためのキーワードとして、リソースパーソンの矢野氏が「利害関係」を挙げられたことが印象的だった。利害関係ということばに対して、私自身も引っかかるところがあり、参加者からも様々な意見が出された後、自己実現、ギブアンドテイクとまとめられた。報告の際に、矢野氏が指摘されたように、国際協力は善意やボランティア精神によるものだという意識が自分の中にもあったことを認識できた場面だった。

全 体 会

日 時：2002年12月22日(日) 15:30～17:00

場 所：福岡天神ビル11階 10号室

全体会概要

1 目的

各分科会の成果を他分科会参加者と共有し、全体で意見交換を行うこと。

2 内容

はじめに、今回のワークショップの主催団体の1つであるNGO福岡ネットワークの吉野あかね事務局長より開会の挨拶があった。続いて、各分科会のコーディネーターより、リソースパーソンの紹介と、どのような内容の分科会であったかを簡単に発表した。

次に、参加者達は、各分科会の受付時に配布されたシールの色別ごと、11グループに集まり、担当スタッフのコーディネートのもと、分科会でメモしたキーワードについて一人一人感想や意見を述べた。その際、キーワードを書いた付箋紙を、予め用意された「気になる、身になる、みんなの想い」と題したクリスマスツリーの絵に貼っていった。次に、同様のことを意図する付箋紙をグループに分け、クリスマスツリーの枝と幹に分けて貼る作業を行った。つづいて、この枝と幹に合うキーワードを考え記入した。参加者達は自分達のキーワードをどのようにまとめれば良いのか、なかなか意見がまとまらないグループもあり、終了時刻まで熱気にあふれた意見が飛び交った。

見事クリスマスツリーが完成したところで、全グループの発表時間がなかったため、3組のみの発表とし、該当グループの代表者は全参加者の前で、自分たちのクリスマスツリーについて、どのようにキーワードをまとめたかについての、発表を行った。最後に発表した黒グループは、全体で「輪」を基本としたツリーを作り上げ（写真参照）国際協力事業関係者の相互のネットワークと協力が大事であるとまとめた。

最後に、JICA九州国際センター所長より、継続していくことが肝要である旨の話を踏まえた閉会の挨拶を行い、全体会を終了した。



ワークショップの様子



全員の前での発表



クリスマスツリー例

能力向上研修

- 広報強化に向けて -

日 時 : 2002 年 12 月 21 日 (土) 9 : 30 ~ 17 : 30
場 所 : JICA九州国際センター 大会議室

能力向上研修 - 広報強化に向けて -

能力向上研修にはNGOから30名、JICAから10名、元JICAインターン2名、準備委員会から9名の計51名が参加した。自分たちの広報活動を見つめ直すためのワークショップを行った後、NGO2団体から事例発表をしてもらい、最後にJICAでの広報戦略についての紹介を行った。ワークショップ、事例発表共に、時間が不足したため、参加者からはもう少しじっくりと取り組みたかった、質疑応答の時間をとってほしかったとの意見はあったが、満足度は83.7%と、高い評価を得ることができた。

1. プログラム

(1) 目的

一般的に国際協力が必ずしも市民の身近な活動ではないことが現状である。これは、国際協力関係者による積極的な広報展開がなされていないことにも一因があるものと思われる。

そこで、本研修では広く市民に国際協力活動の理解を求める上で重要な「広報」に焦点を当て、他団体の事例に学ぶとともに、各団体の活動目的等を的確且つ積極的に発信する方法を共有する。

(2) 募集対象

九州7県内の国際協力に従事するNGOスタッフ及びJICA職員・国際協力推進員

(3)日 程

9 : 00	受 付
9 : 30 ~ 10 : 15	オリエンテーション 山口 三郎 JICA九州国際センター 挨拶 アイスブレイク(自己紹介) 担当：NGO福岡ネットワーク事務局長 吉野あかね 氏
10 : 30 ~ 12 : 30	ワークショップ 「自分たちの広報をみつめなおそう」 *年間の広報計画はできていますか？ *興味・関心を引くキャッチフレーズはつけていますか？ *総花的な広報をしていませんか？ 講師：シャプラニール常任運営委員 福沢 郁文 氏
12 : 30 ~ 13 : 30	休 憩
13 : 30 ~ 14 : 30	ワークショップ 午前の続き 講師：シャプラニール常任運営委員 福沢 郁文 氏
14 : 45 ~ 16 : 00	NGOの広報～事例紹介～ パネルディスカッション：様々な広報の形 発表者： 自立のための道具の会 事務局長 川島 康治 氏 (社)シャンティ国際ボランティア会 広報課長 高島 久夫 氏 コーディネーター： NGO福岡ネットワーク運営委員 西嶋 克司 氏 コメンテーター： シャプラニール常任運営委員 福沢 郁文 氏
16 : 15 ~ 17 : 30	JICAの広報～市民参加型国際協力に向けて～ ・JICAの広報動向 ・プレスリリース作成講座 講師：JICA総務部 広報課課長代理
18 : 00 ~	意見交換会

2 . 研修内容

(1)アイスブレイク

NGO福岡ネットワーク事務局長 吉野あかね 氏

流 れ

1 . 自己紹介 2 . 4 隅ゲーム 3 . グループ分け

参加者

約50名 6、7人×8グループ

実施要項

時数：35分

対象：NGO、JICA職員

場所：教室型

教材：国旗のシール人数分（6、7人×8カ国）

ねらい

セミナーの目的を参加者が共通して認識する。

参加者同士の初対面のぎこちなさを省き、研修に主体的に取り組む雰囲気を作る。

内 容

ア . 自己紹介

近くの人と2人一組を作る

握手する

自分の知っている外国の言葉で挨拶する

団体と名前を紹介する

ただし、団体の活動は10文字で紹介

イ . 4 隅ゲーム

質問 (Q) : 自宅からのこの会場までの移動時間は次のいずれですか。

[1 . 30分以内 2 . 1時間以内 3 . 2時間以内 4 . それ以上]

答のエリアへ移動してください。

(どちらから来ましたかなど数名にインタビューする。)

Q : 貴団体の広報誌の発行頻度は次のどれですか。

- | | |
|--------|-----|
| 1 . 毎月 | 15名 |
| 2 . 隔月 | 7名 |
| 3 . 季刊 | 10名 |
| 4 . なし | 15名 |

Q : 広報担当を専属にしている人がいますか。

- | | |
|----------------|-----|
| 1 . いる | 12名 |
| 2 . 担当いるが専属でない | 14名 |
| 3 . 担当いない | 12名 |
| 4 . その他 | 8名 |

Q : 最後の質問です。研修を受ける皆さんの今の心境は次のどれですか。

- | | |
|---------------|-----|
| 1 . わくわく | 10名 |
| 2 . 普通 | 18名 |
| 3 . 不安 | 25名 |
| 4 . くるんじゃなかった | 0名 |



アイスブレイク : 4隅ゲームの様子

ウ . グループ分け

輪になってもらい、事務局職員が国旗シールを参加者の背中に張る。

言葉をしゃべらないで同じ国の仲間を見つけ出し、グループになってもらう。

5人そろったところは、荷物を持って各国のテーブルに移動する。

以上でアイスブレイクとグループ分けが終了となる。



アイスブレイク：グループ分けの様子

(2)ワークショップ 「自分たちの広報をみつめなおそう」
 シャプラニール常任運営委員 福沢 郁文 氏

プログラム

ア．広報とは何か

NGO自身の広報誌の見直し
 イメージの統一性
 テーマの継続性

コピーを構成する10の要素
 基本フォーマットの大切さ

イ．キャッチコピーを考える

写真のキャプションづくり

NGOのキャッチフレーズづくり

ウ．広報ツールについて考える

リーフレット、ポスター

機関紙

エ．広報の問題を解決する

問題を解決するには
 解決に向けての方向性

JANIC研修グループの分析
 グループ発表

参加者

約50名 6、7人×8グループ

事前準備

各団体の広報の問題点をアンケート調査

実施要項

時数：3時間 対象：NGO、JICA職員 場所：グループワーク型

教材：NGO各団体の印刷物、雑誌の広告ページ、JICAフォトランゲージキット、
模造紙、付箋紙、マジック

内 容

ア．広報とは何か

NGO自身の広報誌の見直し

レジュメで今日のプログラムを説明。

各団体の広報・チラシ・ポスターを机の上に出して各グループで見比べる。

Q：NGO活動をどれ位続けていますか？

答：5年未満 半分 5～10年内 40% 10年以上 数名

ここでテーブル上の広報誌を眺めて、1人1分ぐらいでNGO自身の広報誌の問題を述べる。広報誌の問題を1個2個あげて一巡したら終わりとなり、グループ毎に発表する。

フォスタープランは支出20億のうち3億を広報用に代理店を通じて使っている。広報は重要だ。小さいNGOは広報にかけるお金は少ないが工夫できることはある。



ワークショップ：コーディネーターによる説明



ワークショップ：広報誌について意見を述べ合う

コピーを構成する10の要素

キャッチフレーズ（簡潔な宣伝文）
サブ・キャッチフレーズ
ボディコピー（全体の宣伝文）
イベント名、商品名
組織名
共催・協賛・協力団体
スローガン
参加費・商品価格
参加規模・スペック
お問合せ先

イメージの統一性 NGO・CI計画

サイン・シンボルマーク
ロゴタイプ
キャラクター
ステーションナリーの統一
清刷りシートと広報マニュアルの作成

キャッチコピー作りのコツ

関係の無い単語をつなぐ文章スキルが必要。

例えば「電柱・口紅・椅子」の単語を使い200字で読者を捕らえる文章を書くなど。

発想：逆転 ひねり ひっかけ

手法：常套句（歌）を一部変更。流行語を入れる。

広報担当者の常備品

カメラ、スケッチ、メモ帳

コピーを構成する10の要素

月刊誌2冊分の広告を見る。構成要素に注目する。

また、広告をリライトしてみると結構な文字数である。あまり必要でないものは小さい文字で書いてあって読みたくないものだが、情報量の多さ（=精密さ+緻密さ）の面では重要である。興味を持った読者は、編集後記もしっかり読んで手紙を送って来る。

イメージの統一性

団体のキャッチコピーは今年、3年、5年、...、50年単位で明確にする。（できる範囲）

「GUCCI」は、ロゴだけでこれだけ印象的だ。広告は軽薄でシンプルに作る方法がある。国際協力分野はカタカナ・略語が多く理解が難しい。堅苦しい言葉で書くと振り向かれない。NGOの情報誌の問題[古い、難しい]に対して改善できるところもある。

参加NGOからの広報パンフレットに対するコメント：

- ・字が多い
- ・絵や写真が少ない
- ・内容が難しい
- ・情報が古い
- ・インパクトが無い
- ・パッと見の印象がない
- ・キャッチフレーズがない
- ・団体ロゴがない
- ・周知が行き届いてない
- ・配る機会が無い
- ・郵送費がかさむ
- ・締め切りを守ってくれない
- ・チラシを作るお金が無い

イ．キャッチコピーを考える

写真のキャプションづくり

NGOのキャッチフレーズ作り

JICAフォトランゲージを各自一枚ずつ持つ。

雑誌広告を参考に手持ちの写真にキャッチコピーやキャッチフレーズを作る。

次にグループでコピーを回覧して特にいいのには を、

次に 、 をつける。変えて良くなるところは添え書きする。

次に写真では解らない情報を加えて150字でボディーコピーを作る。

フォトランゲージの写真解説を参考に何本か書く。

書いたら他の人に評価してもらう(、 など)。

フレーズ作りのコツ

バリエーション(複数)を作る。

・文節の前後入れ替え。

・単語の入れ替え。

・変な言葉を一言ませる。

驚き、発見、熱意を書く。

広報はパッと見せながらじっくり丁寧に説明する。



ワークショップ：キャッチコピーについての意見交換

～日常で広告の訓練～

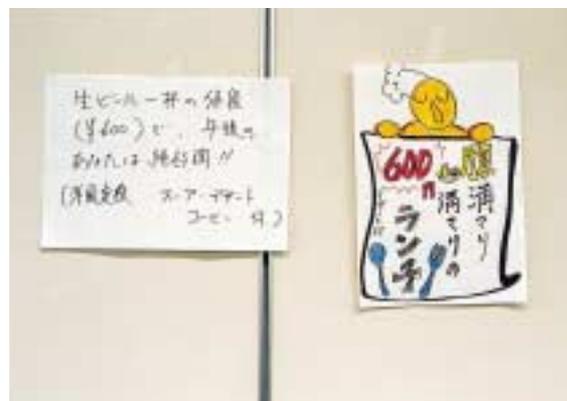
ランチでコピー

昼食時間に、用意されたランチを食べるだけではなく、そのランチメニューを売り出すヘッドコピーとキャッチフレーズを考える。

・値段 ・クオリティ ・見た目 ・器 ・素材 をよく観察する。A4紙にデザインしながら記入し、右下に自分のシンボルマークを書く。



本日のランチ



宣伝用ランチコピー

ウ．広報ツールについて考える

リーフレット、ポスター（シャプラニールのリーフレットを用いて）

象徴性・シンボル性・サイン性に注目する。

「シャプラニール」の毛筆の字体は、30年目を迎え組織がかっちりしすぎ、やりたいことができなくなってきたので、原点にアクションを戻そうという象徴である。

唐辛子はキャラクター&アイキャッチであり、ロゴタイプはシンボル&アイキャッチとしてバッジや広告としてバッジや広告など何にでも配置している。

一番いいのはデザイナーを会員にすることかもしれない。

機関紙（開発教育協議会の機関紙を用いて）

・サムネイル（絵コンテ）

横組みより縦組みの方が作りやすい

・文字

若い読者向けならば小さくて良い

・グリッドシステム（＝紙面をデザインする台紙）

余白・タイトル・ボディのレイアウトフォーマットを決め、ロゴやキャッチコピーを隅に入れる。

エ．広報の問題を解決する

問題を解決するには

JANI 研修グループの分析

解決に向けての方向性

グループ発表

一番悪い広報とは、汚い字、誤字脱字、投遣りなものである。

組織も人格を持った存在として品のある広報を心がけ、きちんと熱意を伝えるようにすることが大事である。

オ．ブレインストーミング

～広報の抱える問題点～

各グループ毎に自分たちが抱える広報の問題点を2項目決める。

模造紙に「解決にむけての対応策」について付箋紙を用いながら話し合い、その手段方法を書き出す。

他グループと互いに成果を発表し合い、情報を共有する。

今日のこのワークの結論をいつ、誰が、どうする、のかが難しい。



ワークショップ：グループワークの様子



ワークショップ：他グループとの成果共有

カ．最後に

今日のこの体験を各団体に持ち帰って、1日かけて編集会議、広報会議をしてほしい。

また、自分の所属する団体で、広報に欠けている部分は何か、推進する要素は何か、を割り出してみることを勧める。

(3)NGOの広報事例紹介

パネルディスカッション：様々な広報の形

コーディネーター：NGO福岡ネットワーク運営委員 西嶋 克司 氏
コメンテーター：シャプラニール常任運営委員 福沢 郁文 氏

▷発表者1：自立のための道具の会 事務局長：川島 康治 氏

自立のための道具の会 道具をとおして生活が見える
団体規模：会員数 約300名
予 算：昨年度3,000万（会費＋補助金や助成金）

- * ロゴマーク 金槌で東西南北を結ぶ会報や、FAX送信状など、会から発行する紙媒体のものには必ず印刷する。ロゴの場所も確定しておく。
- * 毎年の目標と評価を明確にし、手元に残る資料を念頭において作成する。
- * 対象を分けた資料、発行物の作成
（団体に対する理解度や、団体イベントへの参加歴など）
- * スライドでの活動紹介
- * 様々な広報
地球サイズのリサイクル 新聞に掲載 紙媒体での広報
- * イベント
地元のイベントに参加 直接参加することでの広報
+ αとなる層への参加の呼びかけ
- * プロモーションビデオ（活動紹介ビデオ）
総合学習や地域イベント、セミナーなどで上映
- * オリジナルグッズ 木を使った小物

▷発表者2：(社)シャンティ国際ボランティア会 広報課長：高橋 久夫氏

シャンティ

サンスクリット語で、「平和・心の静寂」を意味する。
世界の人々と『共に生き、共に学ぶ』ことを通し、平和な社会づくりをめざす。
1980年、カンボジア難民が暮らすタイの難民キャンプで、子どもたちへの「絵本の読み聞かせ」から活動をスタート。

- * 広報とは何か？
NGOにとっては、Public Relation もっとも大切なことではないか？
- * なぜ広報を？
自分たちの活動を外部に知らせる

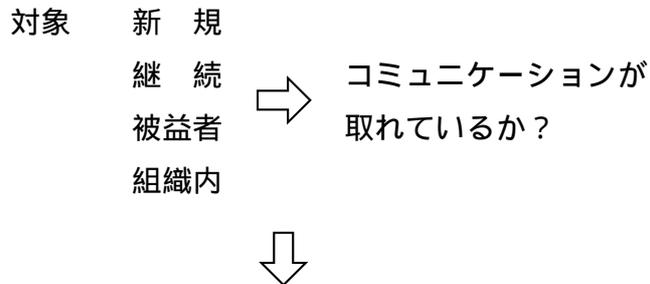
外部とのコミュニケーションをとる

* 対象は何？

自分たちが、誰に伝えたいのか？

例) ポスターを作ったとする どこに貼るのか？

配布先、配布対象が明確でないものは作成しない。



各団体内でもう一度見直す必要があるのでは？

* 誰にでも分かる文章 このようなものは不可能。

どのような資料が...

どのようなねらいで(目的で)...

対象はどこ...



パネルディスカッションの様子

▷ 発表者への質問

(回答者 : 川島氏 K、高橋氏 T、福澤氏 Fとする)

* 広報の評価のやり方

K : 本当に成果があるのか、またどのような成果があるのかということ把握するのは極めて困難である。

T : 現在、当団体では、寄付制度が2通りある。(指定/無指定)団体としては、無指定を増やしていきたいが、それには評価の数値化は必要条件。しかし、数値化の前に、各団体がまず、指標を作成しなければならないのではないか。

F : ダイレクトメールでの返答(アンケート)で、現在のところは把握し得ている。

* 今後 NGOが目指すもの

会員拡大 ?

販売収入増加 ?

T : 各団体は大きくなりたいのか?まず、各団体がミッションを明確にする。その目標によって、広報が変わる。

F : 「みんなが参加するもの」と考えると、自然とビジョンは広いものになっていくのではないか?しかし、その中から、やれるものからやる。

* ビデオ広報効果

T : ビデオは効果がみえにくい。これが直に会員増加に繋がってはいかない。

F : ビデオは効果的である。短時間で分かりやすい。

K : 一度作成すれば、コピーするのに費用はかからないし、広報としては効果的だと思う。

最後に、参加者全員に「広報とは何か?」を問う。 様々な意見が聞かれる。

広報は、団体のもう一つの人格である

悪い点を知り、改善点を見出すことが大切

広報(広告)は、団体の顔 第一印象

Negativeなイメージを与えない

団体のコンセプトを明確に

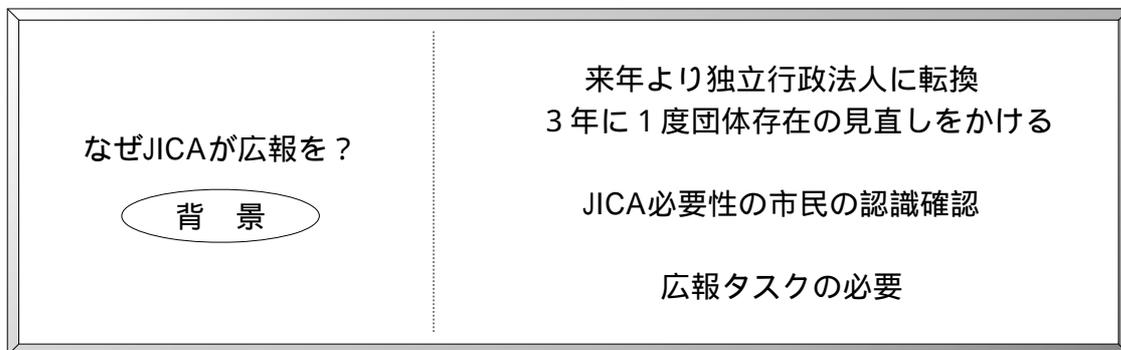
団体内の共通理解が必要



「広報とは何か？」に答える参加者

(4) JICAの広報 ~ 市民参加型国際協力に向けて ~

JICA総務部広報課 課長代理 中村 俊之



独立行政法人の前例：

経済産業研究所

HPの手直し（外部より10名）、役所くささを消した

A評価

× ある文化省の施設

2～3名の行政からの出向 受付にきても誰も対応しない

B評価



1 市民意識調査から

対 象：全国の18～69歳男女
調査人数：3,000人
回 答 率：67%
調査方法：自記式アンケートによる郵送法

* ターゲットを知らないで広報はできない。一般の人が何を考えているのか。

JICAの認知度 5 %

青年海外協力隊の認知度 96 %

Q：どこが行っている事業ですか？ A：青年会議所という回答が多かった。

国際協力 = JICAが結びついている数

⇒ 5 %ではJICAの存在が危ぶまれる

どういう人がどのような答えを出しているか。

結果

開発途上国に関する情報摂取量が多い人ほど、日本が行う
今後の国際協力に対して、積極的な考えを示すことがわかる。

つまり、途上国を知れば理解も深まるのでは？

国際協力への関心はあるが参加にたどりつけない。

結果

一般市民の55%は国際協力に関心を持ち、43%は参加意向を持つ。
シニア層が関心がある。

参加できない理由について / (例) 青年海外協力隊

- ・ 自分のものでできないのに、人のことはできない。
- ・ 恋人が理解してくれない。
- ・ 現実にいけるだけの余裕がある人がいたら、お目にかかりたい。
- ・ 日本に戻ってきたときに、仕事があるかどうか、不安。
- ・ 2年間も外国に行っていると、その間の技術的な遅れを取り戻せない。



2年間というのはマーケットを無視していたことがわかった。

NGOは自由だからその点は大丈夫なのは。

ボランティア参加は「自分のため」
 海外ボランティアへの参加意識は「国際貢献」よりも、「自分のため」との回答率が多かった。



協力隊の募集CMを変えた

改正

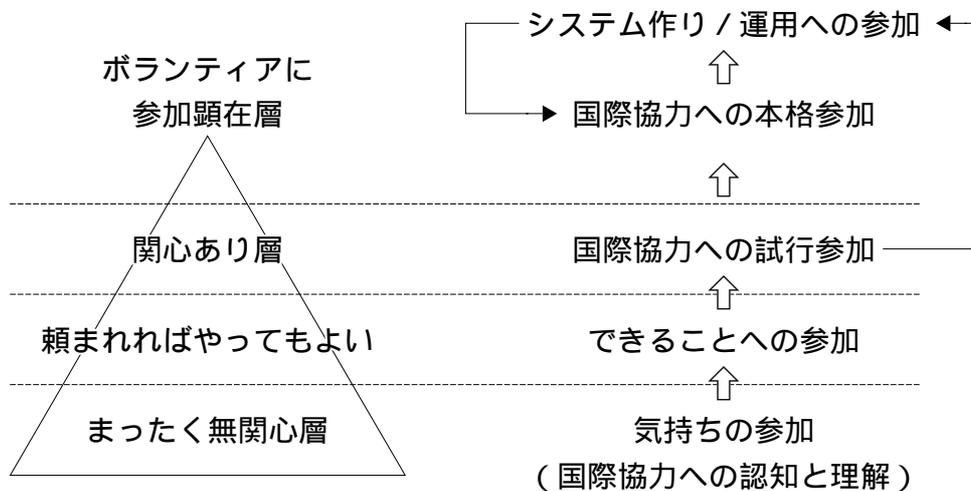
- ・製作は本部の一本化
- ・コンセプトを途上国のためから自分自身のためとした。
- ・説明会場などの情報はすてた。
- ・ホームページとジングル（音）のみ

結果

JICAと協力隊が結びついた。
 製作コストが削減された。
 アカウンタビリティとして示しがつく。

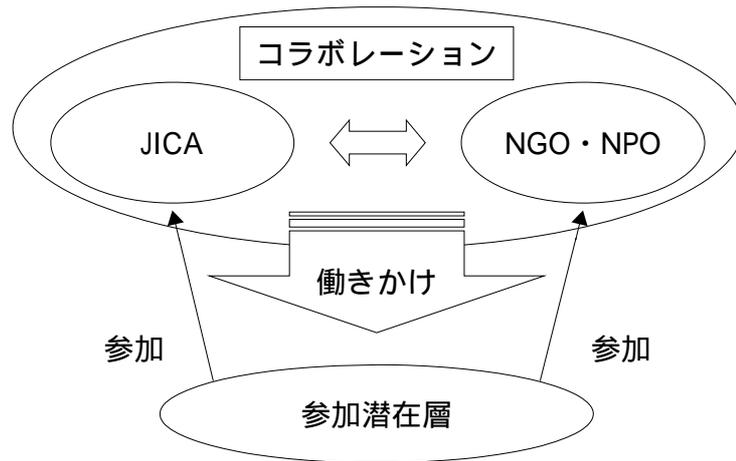
2 参加型はどうしたらよい？

市民参加を促進するには...



NGO・NPOとのコラボレーション

NGO・NPOが培ってきたブランド力、市民とのつながりと、JICAのネットワーク、情報量が結びついて、国際協力への理解・関心・参加が強まる。



参加メニューの条件

- | | |
|--------------------|---------------------------|
| 短時間でできるもの | ・休日・休暇などに参加できるような短時間のメニュー |
| 親子で体験できるもの | ・子どもがいくなら親もという参加の仕方もある |
| 出会い（仲間づくり）が期待できるもの | ・参加した人へのメリット（自分のためという） |

団体が大きくなると抱える課題

- * インナーコミュニケーション
- * 苦情の処理
- * プライシスコミュニケーション



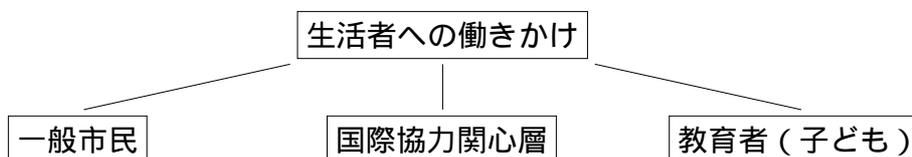
JICA広報課による説明

3 マスコミへの働きかけ - プレスリリース - JICA編

ターゲットグループと広報目標

分類	対象グループ	目標
生活者	一般市民	知名度アップ、親近感醸成
	国際協力関心層	参加促進
	教育者（子ども）	知名度アップ、親近感醸成
マスメディア	マスメディア	事業の理解、知名度アップ
有識者	有識者	事業の理解、知名度アップ
支援連携グループ	行政、地方自治体	事業の一層の理解 参加促進 支援者の拡大
	NGO・NPO	
	企業・団体	
応募者	リクルート	参加促進

現段階）3～4件／1日、全国でJICA関係の記事が広報されている。



- ・事業の実施者がJICAであることを訴求
- ・統一ロゴ・名称の徹底
- ・初心者用広報ツールの開発・使用
- ・関心者用広報ツールの改善
- ・ホームページ、キッズページの改善
- ・「地球家族」の放映
- ・国際協力フォトコンテスト開催
- ・メールマガジンの配信
- ・ニュースレターの配信
- ・イベント・セミナーの開催
- ・サーモンキャンペーンの実施
- ・エッセイコンテスト開催

支援連携グループとのコミュニケーション

- ・ きめ細やかで、タイムリーな情報提供
- ・ 双方向のコミュニケーションの実施
- ・ ご意見の迅速なフィードバック
- ・ 連携イベント・広報の実施

リクルート広報

- ・ 求められる情報の的確な提供
- ・ 場面の積極的な活用
- ・ 理解者の増加促進

マスコミへの働きかけ

- ・ プレスリリースの発行（週1回程度）
- ・ JICAオンライン記者クラブでの活動紹介
- ・ プレスツアーの開催
- ・ 新聞、テレビ、ラジオ、雑誌等への情報提供、取材対応

なぜプレスリリースするのか？

- ・ 支援者（ODAの場合は納税者である「国民」）に事業を知ってもらう
情報開示、支持・支援
- ・ 「自画自賛」より「第三者の視点」
マスコミに通すことで情報に客観性をもたせる
- ・ コストパフォーマンス + 「マスコミ」 = 大量の読者 + 掲載費用タダ

リリースの効果

- ・ 事業に対する理解・指示
- ・ 波及効果 + 口コミによる支持の広がり + 具体的なアクション

リリースの相手

- ・ 新聞（全国紙、ブロック紙、地方紙）
- ・ 通信社（共同通信、時事通信）
- ・ テレビ（全国、ローカル、ケーブル）
- ・ 雑誌
- ・ タウン誌 目的に応じてリリース先を選定
- * 雑誌はあらかじめターゲットを持っている。
- * 活字離れからTVへの進出も考えられる。

リリースの手段

- ・ FAX フォーマット決定（ロゴマーク、連絡先、担当者記載）
- ・ E-mail
- ・ 電話
- ・ 記者会見（日時、場所設定、事前連絡）
- ・ 通信社の出版している“PR手帳”（例：電通のPR手帳 1,800円）

ネタ発掘のポイント

- ・ 「初めての」（例：初めての派遣）
- ・ 「最大規模の」
- ・ 時事ネタ（例：オリンピック開催）
- ・ 記念日（例：12/1世界エイズデー）
- ・ 感動ネタ、癒しネタ
- ・ 意外性（例：タイでうめぼしづくり）
- ・ 地理、歴史（例：アンコールワット、ピラミッドなど、誰でも知っている地名、歴史）

リリースのポイント

- ・ 取材を想定して時間的余裕をもつ（イベントなら1週間前くらい）
 - ・ 「事後報告」は効果薄（取材不可能）
 - ・ 記者と仲良く
 - ・ 記者一本釣り（あなただけに情報提供もたまに必要）
 - ・ 写真、データなどがあれば掲載確立アップ
- * 参考例：青年海外協力隊の活動がガーナで切手に

参考資料

- 1 準備委員会リスト
- 2 「能力向上研修」参加者リスト
- 3 アンケート集計結果
- 4 「能力向上研修」募集要項
- 5 「分科会」参加募集パンフレット

準備委員会リスト

NGO福岡ネットワーク事務局長 / 地球共育の会	代表	吉野あかね
同	事務局	椿原 恵
同	事務局 / くるんて～ぷの会	代表 原田 君子
同	事務局 / セカンドハンド	福岡店責任者 木村 理恵
JVC九州ネットワーク	代表 / 九州国際大学国際商学部	教員 重田 康博
明日のカンボジアを考える会	事務局長	西嶋 克司
同	理事	高柳 彰夫
特定非営利活動法人 筑後川流域連携倶楽部	事務局次長	西川 芳昭
国際開発コンサルタント		内田 義弘
特別非営利活動法人 (申請中) 環境創造舎	代表理事	佐藤 剛史
(財)福岡国際交流協会		本田 剛司
バングラデシュと手をつなぐ会 / NGO調査員		ラフマン・モクレスール
JICA九州国際センター	総務課長代理	大久保宏明
同	総務課	江崎 千絵
同	業務課	加藤 有紀
同	国際協力推進員	坂本 倫子

(計16名)

能力向上研修参加者リスト

人数	氏名	所属	県
1	角岡 知津	JVC九州ネットワーク	福岡
2	辻 美奈子	NPO法人(申請中)環境創造舎	福岡
3	米満 あや	ありギリス	福岡
4	山口 好子	くるんて~ぶの会	福岡
5	徳永 理美	ハビタット福岡市民の会	福岡
6	今村 祥子	Bangladesh と手をつなぐ会	福岡
7	宇治 松枝	Bangladesh と手をつなぐ会	福岡
8	柴田 裕子	ラホール会ジャパン	福岡
9	里川 径一	国際ボランティアを育てる会(AIM)	福岡
10	後藤 順子	(社)ガールスカウト日本連盟 福岡県支部	福岡
11	木村 恵	(特活)明日のカンボジアを考える会	福岡
12	波多江悦男	福岡県国際農業者交流協会	福岡
13	徳本 家康	カンボジア教育支援フロム佐賀	佐賀
14	松尾 諭	カンボジア教育支援フロム佐賀	佐賀
15	嶋田 寛子	シャプラニール(市民による海外協力の会)長崎	長崎
16	飯田 敏博	熊本ラオス友好協会	熊本
17	木村 浩純	(特活)地球緑化の会	熊本
18	小川ひろみ	日本語研究会ASA	熊本
19	内野 香美	NGO地球風	大分
20	元野 広慈	SIESTA	宮崎
21	山元香代子	Subbi(スービ)	宮崎
22	戸高 豊文	インド国際子ども村「ハッピーバリー」	宮崎
23	上野 敏子	希望の家を支える会	宮崎
24	岩松 妙美	国際こども支援団体“H&H(Heart and Hand)”	宮崎
25	上野 匡毅	地雷ゼロ宮崎	宮崎
26	高島麻衣子	地雷ゼロ宮崎	宮崎
27	西村 宏子	DANKA DANKA	鹿児島
28	酒井 マリ	ナマステ館	鹿児島
29	永田 美里	(財)カラモジア	鹿児島
30	原 奈美	地球市民教育ネットワーク鹿児島	鹿児島

31	松田 怜子	広島大学大学院	元インターン
32	山田 貴子	広島大学大学院	元インターン
33	興津 圭一	JICA中部国際センター 業務課	職員
34	岩崎 昭宏	JICA大阪国際センター 業務課	職員
35	中村 史	JICA中国国際センター 総務課	職員
36	坂本 倫子	JICA九州国際センター	推進員 福岡
37	北村 祐子	JICA九州国際センター	推進員 佐賀
38	川原 規之	JICA九州国際センター	推進員 長崎
39	村上 竜之	JICA九州国際センター	推進員 熊本
40	徳永まどか	JICA九州国際センター	推進員 大分
41	梅崎 光子	JICA九州国際センター	推進員 宮崎
42	丸野 里美	JICA九州国際センター	推進員 鹿児島

上記リストに加え、準備委員会から 9 名参加

アンケート集計結果

[分科会]

1. アンケートの概要

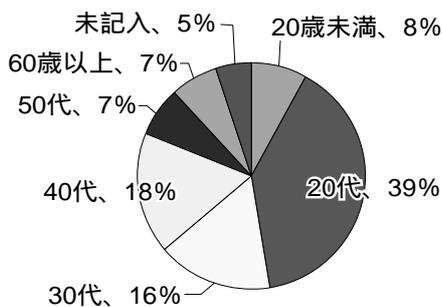
2002 / 12 / 22(日)分科会

- ・ 場所：天神ビル11F会議室
- ・ 参加者数：184
- ・ 回収数：137 (回収率 73%)
- ・ 配布回収方法：各分科会毎に、受付時に参加者に配布し、分科会終了時に回収
- ・ アンケートの原票については添付資料を参照

2. 分科会アンケート結果

全体

(1)参加者の年齢層

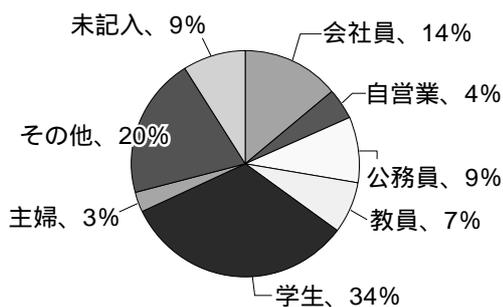


資料：アンケートより作成

(2)参加者の性別

男性	16	37%
女性	24	56%
無回答	3	7%

(3)参加者の職業



資料：アンケートより作成

(4)参加者のNGO / NPO活動の有無

有	69	50%
無	54	40%
無回答	14	10%

(5)情報の入手手段

- ・ その他の内容は以下のような回答があった。
 - ・ 福岡県国際交流プラザからの案内
 - ・ 日田市で行われた、ファシリテーター養成講座
 - ・ 国際協力相談コーナー来訪者へのメール
 - ・ 青年海外協力隊受験会場 (4名)
 - ・ NGO福岡ネットワークから

- ・ディスカッションの時間が足りなかった。
- ・幅広い意見にふれることができて、大変有意義でした。
- ・たくさんの意見を聞いてよかった。
- ・知らないことが多すぎて勉強になった。
- ・3人の講師の方のお話はとてもためになりました。(特に丸野さん)グループに分かれての話し合いも、自分と同じようなことを考え、がんばっている人たちがいることを感じ、うれしかったです。
- ・中国サークルを大学で作っているのですが、どうしたらお互いに日本と中国が理解し合えるかが学べたような気がした。
- ・発言したいけど、言い出せなかった。時間が欲しかった。
- ・講師の経験を聞いて、勉強になった。
- ・もう一步踏み込んだところまでいきたかった。不完全燃焼。
- ・実際に現場でNGOの活動をされた方の話が聞けて、参考になった。NGOやJICAの活動が市民に広く認知されればよいなと思った。
- ・分科会全体では新しい知識、情報を得ることができた。各人の経験に基づく見識を聞くことができました。

第4分科会の感想

	はい	どちらでもない	いいえ	未記入
参加してよかった	48	4	0	2
わかりやすかった	35	16	0	3
議事進行が良かった	35	12	2	5
講師がよかった	36	12	1	5
勉強になった	43	7	0	4
ネットワーク作りにつながった	24	23	0	7

- ・お気づきの点があれば(自由記述)
 - ・「生きる力を～」のテーマが大きすぎて、焦点がぼけてしまった。
 - ・ディスカッションは論題のリードが必要
 - ・もう少し中国や韓国の話を取り上げてほしい。
 - ・班のまとめを全部聞きたかった。
 - ・ほかの分科会の資料がほしかった。
 - ・1グループの人数が多い。
 - ・ディスカッションの時間がもっとほしかった。
 - ・進行がスムーズだった。準備がしっかりされている。
 - ・コーディネーターのみなさん、お疲れさま。
 - ・もう少し、ディスカッションの場が欲しかった。
 - ・リソースパーソンにももう少しポイントを押さえて話をして欲しかった。
 - ・2日間、貴重な学習をさせていただいたのですが、正直、新しい「芽」は育たない。国際交流・NGOは大事だが、それぞれの意識改革が必要。
 - ・じっくりとネットワークができる機会をまたつくってください。
 - ・時間が押していた。
 - ・長い間話を聞いてもつまらなくならなかった。
 - ・生きていくためには教育が必要不可欠だということを再確認した。
 - ・丸野さんのお話をもっと聞きたかった。
 - ・まだまだ識字教育が必要なことを感じる。
 - ・少人数でグループを作れたらもっと楽しかったと思います。
 - ・他の分科会にも参加したかった。
 - ・いろいろな面から教育を見ることができてとてもよかった。
 - ・国際交流・理解・教育なので、もし、もっと多くの外国人がいらっしやればよく交流できるしもっと多くの意見を聞くことができるのではないかと思う。
 - ・グループでの時間がもう少し欲しい。

第2回NGO - JICA合同ワークショップ 分科会アンケート

Q1 ご自身について

- ・年齢 20歳未満 20代 30代 40代 50代 60歳以上
- ・職業 会社員 自営業 公務員 教員 学生 主婦 その他
- ・性別 男 女
- ・NGO・NPO・ボランティア団体の活動にかかわっていますか? はい いいえ

Q2 本日のワークショップをどこで知りましたか?

- ・マスコミ 西日本新聞 朝日 読売 NHK 山口 その他
- ・ダイレクトメール NGO (団体名:) JICA
- ・設置のチラシ (場所名:)
- ・ホームページ NGO (団体名:) JICA
- ・メールマガジン NGO (団体名:) JICA
- ・メーリングリスト NGO (団体名:) JICA
- ・知人から/くちこみ ・ その他 ()

Q3 どの分科会に参加しましたか?

- 第1分科会 第2分科会 第3分科会
第4分科会 第5分科会

Q4 分科会についての感想を教えてください。(複数回答可)

- | 今回のワークショップ全体の満足度は何パーセントですか? | % | | |
|-----------------------------|----|-----------|-----|
| 参加してよかった | はい | どちらともいえない | いいえ |
| わかりやすかった | はい | どちらともいえない | いいえ |
| 議事進行が良かった | はい | どちらともいえない | いいえ |
| 講師がよかった | はい | どちらともいえない | いいえ |
| 勉強になった | はい | どちらともいえない | いいえ |
| ネットワーク作りにつながった | はい | どちらともいえない | いいえ |

【ご意見・ご感想】

Q5 そのほか、お気づきの点等お書きください。

Q6 今後もこのような国際協力に関する情報交換及びネットワークづくりの場が必要と思いますか?

- はい(期待するイベント:) いいえ

Q7 下記の資料の送付を希望しますか? はい いいえ

- ・「国際協力ニュース(NGO福岡ネットワーク発行) 3ヶ月間の限定送付
- ・「九州ネット(JICA九州国際センター発行)
- 「はい」とお答えの方

住所 〒

名前

E-mail

ご協力ありがとうございました。

*添付の付箋紙は全体会で使いますので、分科会の中で感じたことを「キーワード」でお書き下さい。

[能力向上研修]

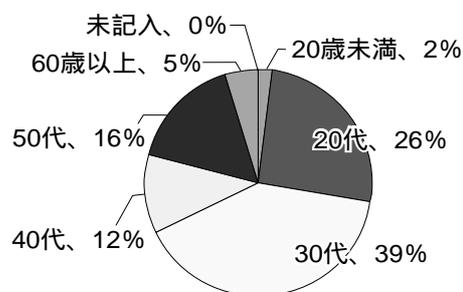
1 . アンケートの概要

2002 / 12 / 21(土)能力向上研修

- ・ 場所：JICA九州国際センター
- ・ 参加者数：51
- ・ 回収数：43 (回収率 84%)
- ・ 配布回収方法：受付時に参加者に配布し、ワークショップ終了時にJICA職員が回収
- ・ アンケートの原票については添付資料を参照

2 . 能力向上研修のアンケート結果

(1)参加者の年齢層



資料：アンケートより作成

(2)参加者の性別

男 性	16	37%
女 性	24	56%
無回答	3	7%

(3)参加者の所属

JICA	6	14%
NGO	32	74%
NPO	1	2%
無回答	4	10%

(4)平均満足度 ... 83.7% (有効回答数 33、無回答 10)

* 100%以上の回答は100%としてカウントしている

(5)能力向上研修の感想

	はい	どちらでもない	いいえ	未記入
参加してよかった	40	2	0	1
わかりやすかった	32	6	2	3
議事進行が良かった	32	8	0	3
講師がよかった	34	5	0	4
勉強になった	39	2	0	2
ネットワーク作りにつながった	26	12	1	4
今後の研修の希望	42	0	0	1

自由記述

- ・ 広報と一口で言っても、あらゆる手段、目的があることを再認識しました。又、他の団体も私共団体と同じような問題を持っていることをシェアできたのはよかったです。
- ・ 今回の研修は非常にわかりやすく、広報活動についてすごく勉強できたと思います。是非、今後もこういった研修を開催されれば良いと感じました。
- ・ 他の会の広報のあり方姿勢を知ることができ、参考になった。自分の会の広報のあり方を客観的に見ることができた。

- ・めちゃめちゃ面白かったです。めちゃめちゃスキルアップできた。本当に話題提供者がよかった。
- ・NGOの運営（経済的）なもの。情報を共有できる時間があつたら良かったと思います。
- ・内容が多かったので、もう少し少なくして、深めることをしてもいいのでは。
- ・参考になった。改めて広報の重要性を感じた。
- ・短い時間でわかりにくいので、内容を深めて欲しい。
- ・アイスブレイクの方法が参考になりました。JICAの調査結果がためになりました。
- ・NGOの事例をもっと聞きたい。
- ・色々な活動をしているNGOの方々と会い、話せたので今後の活動の勉強になった。
- ・もう少しじっくり取り組みたい。テーマの内容の割に時間が短い。
- ・広報に関するモチベーションがあがり、もっと会員のみんなどとも共有すべき問題だと思いました。
- ・ボランティアとしてNGOで活動していても、普通のニュースレターのもつ重要性を認識していなかったのが、勉強になりました。
- ・研修は初めてだったので、不安だったが、すごくわかりやすく楽しかった。
- ・パネルディスカッションの時間が短かったように思う。
- ・広報のワークショップの時間が短すぎた。リソースがすばらしかった。
- ・NGO - JICAの具体的事例が聞けてよかった。
- ・話が面白く、楽しかった。ワークショップは長かった。課題を詰め込みすぎた気がする。インターネット活用の話も聞きたかった。
- ・もう少し参加者が発言できる工夫をしてください。
- ・ワークショップが分かりにくかった。
- ・参加者の力強い活動に感動した。
- ・団体の活動内容が明記されていればより分かると思う。若い人が多いことにとっても力強く感じた。
- ・広報の重要性について理解できた。また、手法を得ることができ、広報強化に向けて取り組みたい。
- ・午前中の進行は話が長く、実際に話し合う時間が短いと思いました。
- ・頭の体操だった。常に見ていたコピーやロゴ、イメージの統一の重要性を再確認した。
- ・テーマの設定があり、よかったと思う。
- ・とても勉強になりました。行っている活動は違っても、開発途上国への熱い思いはみんな同じだと思いました。
- ・非常に分かりやすく、勉強になりました。参加できてよかったです。
- ・難しい所もありましたが、参加して楽しかったです。
- ・JICAの広報と広報の実際を証明して下さったことは参考になりました。
- ・研修内容が重要かつ広範囲でありじっくりやるには時間が足りない。
- ・テーマが絞り込まれてワークショップからJICA広報までよくつながっていた。
- ・自分の広報活動を見直す視点をたくさん得た。
- ・リソースパーソンが充実していて、話がとても面白かった。広報について技術的な面から現在の状況まで話が聞けて、参考になった。
- ・あっという間に時間が過ぎてしまった。
- ・リソースパーソンの話が参考になった。具体的な事例が聞きたかった。

(6) 今後、研修をどのように活かしたいですか？

自由記述

- ・まずは、会の運営委員会に今日のことを報告して、情報をシェアしたいと思います。今日の内容を糧にして、広報の意味を今一度、会の人と考えていきたいです。
- ・今回の研修の内容を組織の人間にも伝えたいと思います。
- ・まず、広報（活動）を見直す。
- ・本当に力を入れていきます。充実したワーキングでした。
- ・広報については、地域ではある程度認識されていると思うが、名前のみでどのようなことをしているのかがわからないことが多いので、その点を改善したい。
- ・広報活動の計画を立てて、ターゲットを決めて少しずつでも始めたい。
- ・自分の団体に帰って、広報の強化。

- ・広報ツールの作成
- ・会報作成などに活かしたい。
- ・JICAの調査結果を参考に対市の広報を考えていきたい。
- ・自分から進んで広報に関わっていく。
- ・目に見える変化に結びつくようがんばる
- ・組織内に情報ネットワークを作り、会議をしたいです。広報の予算を見直し、広報委員会を立ち上げたい。
- ・ニュースレター発行の改善点を見つけ、対策を考えたいです。
- ・これからの広報作成に役立てたい。
- ・今後の広報戦略をメンバーで話し合い、活動に活かしたい。
- ・広報の参考にしたい。また、スタッフの研修にこの研修内容を利用したい。
- ・対象を絞った広報活動
- ・団体の広報
- ・発行物に活かしたい。小さなこと、できることから始めたい。
- ・NGOの工法の改善と、ほかのNGOとのコミュニケーションづくり。
- ・所属団体の疑問解決
- ・広報誌の見直しの実践
- ・広報に関わる企画会議を行い、戦略を明確化したい。同種のワークショップを中部地域で実施することも検討したい。
- ・ここで作ったネットワークを今後の活動に活かしたいです。
- ・所属団体の広報姿勢について再検討、再構築していきたい。
- ・気を引く、目を引く広報媒体を作るために、今日のワークショップを活かしたい。
- ・大阪でのNGO連携イベントの参考にする。
- ・今日学んだことをみんなに知らせて、共有したい。
- ・今日参加していないスタッフに報告して実践したいと思います
- ・広報活動に活かします。でも、まだまだ勉強しなくてはと思います。
- ・広報の大切さを活かしたい。
- ・今日、特に福澤さんから教えていただいたことを実践に役立てて活かしたいです。
- ・貴重なデータの利用。人のネットワーク。
- ・広報戦略
- ・地域活動でのネットワークに。
- ・会長とよく相談する。
- ・広報物の見直し、会員のセグメンテーション、リリースの作り直し。
- ・広報誌について話し合う機会を設ける。
- ・プレスリリースについてとても参考になりました。早速会に持ち帰り、トライしてみたいと思いました。
- ・データなどの収集、整理を行い、徐々に広報を行っていききたい。

(7)研修の運営についてご意見をお聞かせ下さい。

自由記述

- ・大変お疲れ様でした。企画・運営大変だったと思います。これにこりずに、今後もこのようなワークショップを続けて下さい。
- ・良かったです。
- ・福岡から送迎して下さったので、コスト的に助かった。
- ・非常によかったと思います。
- ・楽しく、多くのことが学べた。
- ・2日ぐらいの研修にすれば深まる研修になるのでは。
- ・良かったです。運営委員の皆さんお疲れ様でした。名札はシールでないほうがいいです。
- ・休憩もあり、とてもいいと思う。
- ・段取りもよく、よかったです。
- ・参加者、グループが多く、他のグループの発表をじっくり聞けなくて残念だった。
- ・講師のプレゼンテーションについて、時間が足りなかった。ワークショップをもっと深めてもらいたかった。

- ・ 1日では短い気がした。できれば、2日間以上のワークショップで行って欲しい。
- ・ 時間がなかったが、最後のJICA広報の時に、質問の時間がなかったことは残念。
- ・ もう少し時間に余裕のあるように工夫してください。
- ・ 時間が少なすぎる。
- ・ うまく運営されていた。
- ・ ちょっと盛りだくさんのプログラムだった気がします。でも、とても楽しく、勉強になりました。
- ・ 時間が足りなさそうなのが惜しまれます。
- ・ すばらしかった。ただ、NGO広報の部分だけが分かりにくかった。
- ・ 充実していて満足しました。
- ・ バスの送迎など、手配が行き届いてる。
- ・ もう少し時間が欲しい。
- ・ 多少時間が押してたところはあったが、全体的によかった。
- ・ 各県に持ち帰ってコピーイベントができるように、資料をPDFで配るといいのでは。
- ・ もう1日あってもいい。
- ・ ワorkshopの時間がもう少し欲しかった。
- ・ 休憩の取り方がよかった。

(8)また、どのような研修講座を希望しますか？

自由記述

- ・ 会の運営。マネージメントの仕方。「開発」のワークショップ。
- ・ NGOやJICAの横へのつながりをもてるような機会も作っていただきたいと思います。
- ・ 事務計画のたて方と評価
- ・ さらに具体的なスキルアップトレーニング。福澤先生のワーキングは実践的で非常によかったです。
- ・ NGOの基礎的コンセプトと運営。特に住民参加型にするにはどうすればよいか。
- ・ NGOからNPOへと移行していくための条件や手続きについての研修
- ・ 実践的な内容
- ・ 広報、語学、女性の自立、ホームページ・ポスター作成
- ・ 自分のNGOが対象としている国に関するODAの状況や、ほかのNGOの支援状況を知り、今後の活動の参考にできるWS。
- ・ 国際協力に関することなら何でも。
- ・ NGO、経営戦略
- ・ 運営に関する悩み。広報に関すること。
- ・ マネージメント、PCM、評価手法
- ・ ネットワークについて
- ・ プロジェクトの発掘。プロジェクトの評価。
- ・ 活動資金を作り出す実践的な研修
- ・ 青年海外協力隊に参加された方の声を聞く。
- ・ 資金調達法
- ・ 開発教育
- ・ 派遣講師養成講座
- ・ 広報のHP利用・作成について
- ・ 具体的な紙面づくり
- ・ HPづくりや、パソコン活用、サポートリソースについての実践
- ・ 人を呼ぶためのイベント企画の立て方
- ・ 団体として必要な組織業務とその方法
- ・ 簿記、営業フォローアップ
- ・ プロジェクト評価
- ・ テーマに沿って、立場の異なる方がパネリストになるような講座。1つのテーマに絞って、深められるもの。

(アンケート集計 環境創造舎)

第2回NGO - JICA合同ワークショップ
能力向上研修～広報強化に向けて～
アンケート

Q1 あなたの

年齢	20歳未満	20代	30代	40代	50代	60歳以上
性別	男	女				
所属	NGO	JICA				

Q2 研修内容についての感想を教えてください。(複数回答可)

・ 今回の研修全体の満足度は何パーセントですか？	_____ %		
・ 参加してよかった	はい	どちらともいえない	いいえ
・ わかりやすかった	はい	どちらともいえない	いいえ
・ 議事進行が良かった	はい	どちらともいえない	いいえ
・ リソースがよかった	はい	どちらともいえない	いいえ
・ 勉強になった	はい	どちらともいえない	いいえ
・ ネットワーク作りにつながった	はい	どちらともいえない	いいえ

【ご意見・ご感想】

Q3 今後、研修をどのように活かしたいですか？

Q4 研修の運営について、ご意見をお聞かせください。

Q5 今後もこのような研修講座を希望しますか？またどのような研修講座を希望しますか？

希望する 希望しない

【希望する研修講座内容】

ご協力ありがとうございました。(交流会前までにご提出下さい)

第2回NGO - JICA合同ワークショップ
～ 能力向上研修～
(広報強化に向けて)

募集要項

日 時 : 2002 年 12 月 21 日 (土)

9 : 30 ~ 17 : 30

場 所 : JICA 九州国際センター

TEL (093) 671 6311 FAX (093) 663 1350

主 催 : 第2回NGO - JICA合同ワークショップ準備委員会
NGO福岡ネットワーク、JICA九州国際センター

後 援(予定): 福岡県、福岡市、北九州市、(財)福岡県国際交流センター、
(財)福岡国際交流協会、(財)北九州国際交流協会、
西日本新聞社、朝日新聞社、毎日新聞社、読売新聞社

1. 目的

一般的に国際協力が必ずしも市民の身近な活動ではないことが現状である。これは、国際協力関係者による積極的な広報展開がなされていないことにも一因があるものと思われる。

そこで、本研修では広く市民に国際協力活動の理解を求める上で重要な「広報」に焦点を当て、他団体の事例に学ぶとともに、各団体の活動目的等を的確且つ積極的に発信する方法を共有する。

2. 実施日

12月21日(土) 9:30~17:30 (18:30~20:00 意見交換会を予定)

3. 実施場所

JICA九州国際センター (JR八幡駅 徒歩10分)

4. 募集人数

40名 (福岡15名、福岡県外 4 ~ 5名)

各NGO団体より基本的に1名、先着順で定員になり次第締め切ります。

5. 募集対象

九州7県内の国際協力に従事するNGOスタッフ

6. 参加費用

(1)研修受講料無料

(2)交通費・宿泊費について

1) 福岡県内の方

- ・指定の場所 (出発: 8:00AM、天神中央公園前 - 福岡市役所のアクロス側) へJICAバスが迎えに行きます。指定の場所までの交通費は、各自ご負担下さい。
- ・意見交換会後 (20時の予定) JICAバスが指定の場所 (同上) まで送ります。
- ・本送迎を利用されない方は、各自でご負担下さい。

・ 宿泊費は負担いたしません。
(JICA九州国際センター宿泊を希望の方は実費を頂きます。)

・ 昼食は各自でご負担下さい。

2) 福岡県外の方

・ 受講にかかる旅費(交通費のみ) ・ 宿泊費(12 / 20 ~ 22 2泊 3 日) は実費をJICA
が負担いたします。(宿泊場所はJICA九州国際センターとなります)

・ 昼食 ・ 夕食は各自でご負担下さい。

(3) 意見交換会について

12月21日 18 : 30 ~ 20 : 00は意見交換会 (参加費無料) を予定しています。

7 . 応募条件

当該団体代表者の推薦があること (広報に携わったことのある方が望ましい)
引き続き12月22日(日) に行われる NGO - JICA 合同ワークショップ分科会に参加す
ること。(詳細 : <http://www.jica.go.jp/branch/kic/index.html>)

8 . 申し込み方法

参加申込書に必要事項をご記入の上、ファックスでお送り下さい。

9 . 問い合わせ先

JICA九州国際センター 総務課 江崎
TEL : 093 671 6311 FAX : 093 663 1350

【案内図】

JICA九州国際センター 地図 <http://www.jica.go.jp/branch/kic/map.html>

プログラム

12月21日(土)	
9:00	受付
9:30~10:15	オリエンテーション アイスブレイキング(自己紹介) 担当: NGO 福岡ネットワーク事務局長 吉野あかね氏
10:30~12:30	ワークショップ 「自分たちの広報をみつめなおそう」 *年間の広報計画はできていますか? *興味・関心を引くキャッチフレーズはつけていますか? *総花的な広報をしていませんか? 講師: シャプラニール常任運営委員 福沢 郁文氏
12:30~13:30	休憩
13:30~14:30	ワークショップ 午前の続き 講師: シャプラニール常任運営委員 福沢 郁文氏
14:45~16:00	NGOの広報~事例紹介~ パネルディスカッション: 様々な広報の形 発表者: 自立のための道具の会 (社)シャンティ国際ボランティア会 コーディネーター: NGO福岡ネットワーク運営委員 西嶋 克司氏 コメンテーター: シャプラニール常任運営委員 福沢 郁文氏
16:15~17:30	JICAの広報~市民参加型国際協力に向けて~ ・JICAの広報動向 ・プレスリリース作成講座 講師: JICA総務部 広報課

当日用意するもの: 筆記用具

各団体の広報ツール

(リーフレット、新聞掲載記事、HPコピー等)

参加申込書

NGO - JICA合同ワークショップ ～能力向上研修（広報強化に向けて）～

《締め切り 12月9日(月) 午前中》

担当：JICA九州国際センター 総務課 江崎 行 FAX：093 663 1350

お名前（フリガナ）		性別	男・女
所属NGO			
所属先での担当業務			
連絡先（所属先NGO）	住所		
	TEL：	FAX：	
	Eメール		
連絡先（ご自宅）	住所		
	TEL：	FAX：	
	Eメール		
今回のセミナーに対する希望・期待			
宿泊*の希望（福岡県内）	12月21日： 有・無（但し、実費を頂きます）		
宿泊*の希望（福岡県外）	12月20日： 有・無、12月21日： 有・無		
12/22希望分科会	第	分科会	

*宿泊場所はJICA九州国際センターとなります。

上記の者が、NGO - JICA合同ワークショップ～能力向上研修（広報強化に向けて）～に参加することを承認します。

平成 14 年 月 日

所属先団体代表

印

*今後のネットワークづくりのため、当日配布する名簿に氏名、所属団体、連絡先（所属先、ご自宅）を記載することを

了承する 了承しない 部分的了承（ ）は掲載不可

*参加の決定のお知らせは12月11日(水)までにお知らせいたします。決定後に、旅費の振り込みなどに必要な書類をご提出頂きます。

参加申込書

JICA九州国際センター所長殿

JICA主催「NGO - JICA合同ワークショップ～能力向上研修(広報強化に向けて)～」の募集要項の内容について承諾し、同セミナーに参加を申し込みます。

なお、旅費については下記の口座に振り込み願います。

平成 14 年 月 日

現住所：〒 _____

氏名： _____

振込口座： _____ 銀行 _____ 支店

普通・当座 口座番号 _____

名義人(ふりがな) _____

* なお振込口座は本人名義のものに限ります。

自宅から九州国際センターまでの交通経路	(バスを使用される場合は、運賃と会社名をご記入下さい) 自宅(最寄り駅/バス停： _____) 九州国際センター
---------------------	---

第2回 NGO-JICA合同ワークショップ

地域で活かす、地域を活かす、国際協力!!



分科会

九州NGO・自治体・JICA等
ネットワークをとおして、
協力関係づくりの拡充を目指す

日時 **12月22日(日)**
10:30~17:00

場所 天神ビル11F会議室
福岡市中央区天神2-12-1
定員 150名 参加費無料

【プログラム】

10:00~10:30 受付
10:30~15:00 分科会

分科会 1. 地域の持続的発展-住民参加型開発
[2号室] ~国境を越えてつながる地域住民のエンパワーメント~

分科会 2. 地域を守る,地域が守る農業
[3号室] ~環境でつながる地域と世界~

分科会 3. 「共に守ろう,未来の地球(ほし)を!」
[6号室] ~私たちにできる環境保全~

分科会 4. 「生きる力」をはぐくむ教育
[7号室] ~こどもと女性の未来に思いをよせて~

分科会 5. 「南のパートナーとの協力関係づくり」
[8号室] ~南のNGOとのパートナーシップを考える~

15:00~15:30 アンケート記入
15:30~17:00 全体会[10号室]



NGO福岡ネットワーク
代表 二ノ坂 保喜

昨年につづいて、NGOとJICAによる合同ワークショップが開催の運びとなりました。わが国における市民社会の成熟は、NGOの発展とともにある、といっても過言ではないと思います。1993年にNGO福岡ネットワークが誕生して来年は10年を迎えます。現在では18の福岡、北九州地区のNGOが結集して、ネットワークを作り、ともに学びあう場として活動しています。それぞれの団体は、活動地域や対象分野などを異にしていますが、地球的視野に立って考え、Not-for-profitの立場で活動し、グローバルな市民の連帯をめざすという立場を共有しています。また、NGOに対する社会の期待や要望は年々高まってきていることを痛感しています。単なる小規模ボランティア団体から、社会的、歴史的役割を担った、真の「非政府」の「民間活動団体」として、社会的公正を実現していく組織に成長していくことが求められていると思います。

その役割を実現するためにもNGOにとって、JICAや自治体との連携や学びあいは大きな意味を持つものです。昨年第1歩を踏み出したこの共同作業が、今年もテーマを新たに継続されることは、NGO、JICA、自治体関係者それぞれにとって大きな意味を持つものとなるでしょう。さらにこのワークショップを契機に、相互の連携が日常的なつながりへと継続し、深まっていくことを願ってやみません。



国際協力事業団 九州国際センター
所長 山口 三郎

今年8月、持続可能な開発に関する世界首脳会議(WSSD)がヨハネスブルグにおいて開催され、環境問題・貧困問題をはじめ様々な地球規模の課題に対し、早急に私たち一人一人による国境を越えての取り組みが重要であるとの認識が世界中の国々で共有されました。

国際協力を実施するNGO、自治体、JICAひいては私達日本国民が世界の問題に目を向け、私たち自身の問題としてそれら地球的課題の解決に向けての行動を再度強く推し進める必要性のあるこのような重要な時期に、昨年度に引き続き、第2回NGO-JICA合同ワークショップを開催することになりました。

今回は、日本各地域の特性を生かした国際協力の前線で活躍している方々の活動事例を発表していただくことにより、国際協力は私たちの生活と無縁のものではなく、自分たちの身近な地域の発展と開発途上国の発展がつながっていることを、参加者のみなさまが改めて認識する場となることを確信しております。そして、特にここ九州で本ワークショップを開催する意義は、まさに地域の特色ある資源＝“リソース”の宝庫である九州を国際協力の観点から捉えることにより、国際協力が九州の新たな活力の源になると考えています。

今年よりJICAは一層市民との協働による国際協力の促進を目指し、NGOや自治体の皆様との連携による“草の根支援”の国際協力事業を積極的に推進しておりますが、本ワークショップをとおして更なるネットワークの広がり、そして協力関係を強化できますことを願うと共に、お互いの活動の発展へとつながることを願っております。

分科会 1

10:30~15:00

●テーマ●

地域の持続的発展・住民参加型開発
～国境を越えてつながる
地域住民のエンパワーメント～

午前 リソースパーソンによる事例紹介

- ・成毛 克美:筑後川全体を「一つの博物館」とみなすネットワーク型地域再生など
- ・古川 学:人材育成塾によるリーダー造りと、音楽祭、JICA研修員の受入れなど
- ・椿原 まり子:農業を核にみんなが生きていける場造りについて農業者から発言

コーディネーター

竹下 宗一郎 氏

(地球市民教育ネットワーク鹿児島 事務局長)

リソースパーソン

成毛 克美 氏

(NPO法人筑後川流域連携倶楽部 理事・筑後川まるごと博物館 事務局長)

古川 学 氏

(小値賀町役場住民課 係長・おぢか国際音楽祭事務局)

椿原 まり子 氏

(四季菜館 館長)

午後 参加者を含めたディスカッション

【テーマ】

- ・地域にとって開発とは何か
- ・小さな地域が国境を越えてつながる工夫
- ・地域の住民が便益を実感できる参加型開発とは

分科会 2

10:30~15:00

●テーマ●

地域を守る、地域が守る農業
～環境でつながる地域と世界～

午前 リソースパーソンによる事例紹介

- ・椿原 寿之:国境を越えて守る棚田・里山
-山村塾・国際ワークの取り組み-
- ・八尋 幸隆:近代化技術と持続的技術との狭間で
-カンボジア農業の今-
- ・矢澤 佐太郎:途上国、山間傾斜地における農業技術指導の経験から

コーディネーター

佐藤 剛史 氏

(NPO法人(申請中)環境創造舎 代表理事)

リソースパーソン

椿原 寿之 氏

(山村塾 代表)

八尋 幸隆 氏

(明日のカンボジアを考える会 理事)

矢澤 佐太郎 氏

(日本農業実践学園 副託)

午後 参加者によるグループトーク

【テーマ】

- ・農業分野での適切な国際協力とはどのようなものか
- ・農業分野での国際協力を支える土台とはなにか
- ・国際協力と「地域」とをどのように結び受けるか

分科会 3

10:30~15:00

●テーマ●

「共に守ろう、未来の地球(ほし)を！」
～私たちにできる環境保全～

午前 リソースパーソンによる事例発表

- ・高本 師津雄:林業の町が行ってきた町おこしと国際協力の活動紹介
- ・金刺 順平:アマゾン、ボルネオ、国内での環境共生活動と環境協力への課題
- ・手塚 賢至:民・官・学共働の保全活動と海外NGOとの交流

コーディネーター

浜本 奈鼓 氏
(くすの木自然館 専務理事)

リソースパーソン

高本 師津雄 氏
(ODAの木協会(愛媛県小田町) 会長)

金刺 順平 氏
(水保浮浪雲工房 主宰)

手塚 賢至 氏
(ヤツタネ調査隊(屋久島) 代表)

午後 参加者を含めたディスカッション

【テーマ】

- ・効果的な環境協力を行うには、どうすべきか、問題点と解決法
- ・NGO同士及び自治体・JICAとの効果的な協力方法

分科会 4

10:30~15:00

●テーマ●

「生きる力」をはぐくむ教育
～こどもと女性の未来に
思いをよせて～

午前 リソースパーソンによる事例紹介

- ・秋尾 晃正:ごめいさん！そろばんが広げる子供たちの未来
ー日本とタイを結んだそろばん教育ー
- ・エラリー・ジャンクリストフ:フェアトレードで女性たちの自立支援
ーカンボジア職業訓練プロジェクトー
- ・丸野 里美:お母さんたちが識字教育を始めた理由
ーカンボジア農村開発プロジェクトの中でー

コーディネーター

中村 清美 氏
(ワールドスタディーズセンター 主宰)

リソースパーソン

秋尾 晃正 氏
(日本国際交流センター 代表)

エラリー・ジャンクリストフ 氏
(NPO法人セカンド・ハンド スタッフ)

丸野 里美 氏
(JICA九州国際センター 国際協力推進員(鹿児島))

午後 参加者を含めたディスカッション

【テーマ】

- ・世界でおきている教育の問題にどう取り組むか
- ・日本と世界をつなぐ開発教育・国際理解教育が地域でどのような役割を果たせるか
- ・地域で取り組む「生きる力」をはぐくむ教育について考える

分科会 5

10:30~15:00

●テーマ●

「南のパートナーとの協力関係づくり」
～南のNGOとの
パートナーシップを考える～

コーディネーター

重田 康博 氏

(JVC九州ネットワーク 代表/
九州国際大学国際商学部 教員)

リソースパーソン

矢野 孝明 氏

(バングラデシュと手をつなぐ会 前現地駐在員)

鶴田 厚子 氏

(セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン 前事務局長)

笛吹 弦 氏

(JICA九州国際センター 職員)

午前 リソースパーソンによる事例紹介

- ・矢野 孝明:バングラデシュと手をつなぐ会による南のNGOとの協力関係づくりの経験から
- ・鶴田 厚子:セーブ・ザ・チルドレン・ジャパンによる南のNGOとの協力関係づくりの経験から
- ・笛吹 弦:JICAのパートナーシップの経験から

午後 参加者を含めたディスカッション

【テーマ】

- ・パートナーとの活動理由
(パートナーの選択、活動理念など)
- ・プロジェクトの継続性
- ・協力関係づくり(パートナーシップ)の問題点

全体会

15:30~17:00

●目的●

分科会の成果の共有及び
ネットワーク作りを目指す

1.分科会の成果を共有しましょう

午前中参加した分科会での成果を、他の分科会参加者と共有します。
グループ別に、各自分科会で感じたキーワードを元に話しましょう。

2.ネットワークを広げましょう

最後は意見交換の場です。
自由に動き回って、多くの参加者とのネットワークを広げましょう。

第2回NGO-JICA合同ワークショップ準備委員会リスト

NGO福岡ネットワーク事務局長／地球共育の会	代表	吉野 あかね
同	事務局	椿原 恵
同	事務局／くるんて～ぶの会	代表 原田 君子
同	事務局／セカンドハンド	福岡店責任者 木村 理恵
JVC九州ネットワーク	代表／九州国際大学国際商学部	教員 重田 康博
明日のカンボジアを考える会	事務局長	西嶋 克司
同	理事	高柳 彰夫
特定非営利活動法人 筑後川流域連携倶楽部	事務局次長	西川 芳昭
国際開発コンサルタント		内田 義弘
特定非営利活動法人(申請中) 環境創造舎	代表理事	佐藤 剛史
(財)福岡国際交流協会		本田 剛司
バングラデシュと手をつなぐ会／NGO調査員		ラフマン・モクレスール
JICA九州国際センター総務課長代理		大久保 宏明
同	総務課	江崎 千絵
同	業務課	加藤 有紀
同	国際協力推進員	坂本 倫子

●アフガニスタン

【新学期が嬉しくて／笹 良世】



●モロッコ

【歩いていこうネ！／立山 誠】



●中国

【日本人の先生が来たよ！／Su Jie fang】



●日本

【おやつ時間／おおいし 和子】



●タンザニア

【煉瓦を作って学校建設／佐藤 良彦】



●エル・サルバドル

【南 望／西尾 かおる】



●バヌアツ

【徳みがきにチャレンジ！／石森 敬子】



JICA